女鑑

第五十號

明治廿六年十一月五日發行

東京國光社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女鑑第五十號目次

女鑑
婦女の忠愛

論說
女堂心訓(其の貳)……長井行
女子要言第二篇(二十一)……三輪田眞佐子

史談
吉備の兄媛……松野操雄
勇婦みよ女……森茂

家政
育兒小言(三十七)……武谷水城
折法(三)……有住齊
看護法捷徑(二十七)……三笠舍主人

學園
文學畧傳(承前)……難波津淺香

漫錄
沖繩縣下旅行日記　隨々庵主●三卿三說　松野操雄●千世の桁松●門田のさなへ●こほろぎものがたり　師岡須賀子
女畫師(其の貳)……乙羽庵主人

文林
歌　●華頂宮御息所郁子御方●近衛忠煕●東久世通禧●鍋島直大●前田利嗣●高崎正風●前田利鬯●諏訪忠元●植松有經●谷勤●岡部譲●三浦千春●佐々豐水●草野隆道●千日亮●鍋島榮子●前田朗子●伊東ちせ子●松平健子●伊藤生子●田邊君子●田邊たつ子●中澤のふ子●中島歌子●三輪田眞佐子●諏訪晴子●小川農子●師岡須賀子●柳靖子●海上壽子●千裕子
文　中秋朧月　勝家貞眞
●暑中休の間にありしことゞもな　龍ささ子

雜報
●天長節●秋老ひ●菊●女子教育に關する私見

餘芳
みちのつと(承前)……小池道子

敎の庭
歌文數十首

口畫……高橋松亭
挿畫……富岡永洗

吉備の兄媛

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女鑑 第五十號

女鑑

婦女の忠愛

我が國、古より、婦女にして、國の政に與り、軍の事に關し、偉大なる勳功を立てたるもの、甚多し。これ、一は、畏くも、天照皇大神の如き、はた、下りては、神功皇后の如きまし〱て、其の聖德の感化の力の、下に及びたるによるといへども、又、一には、我が國社會の組織は、決して、彼の偏屈なる支那、印度の如く、婦女を賤しめて、ひたぶるに、之を、社會の外に放逐せんとするが如き風と異なり、婦女といへども、才あり、德あるものは、力を、當世に伸ばすことを得たりしのみならず、通常、世の風俗は、男に偏して、女を

卑しめざるに在りしこと、明なり。此の如き皇國の美風を知らずして、ひたすら、支那流義の偏屈主義を摸倣せんとするは、いとも口惜しきことゞもならずや。

婦女は、社會の半面をなすものなり。故に、婦女をして、社會以外に置かんとするは、已に、國家の勢力をして、其の半以上を痲痺せしむるものなり。されば、我が國は我が國の美風によりて、飽くまでも、婦女の地位を保たしめざるべからず。婦女の地位を保たしめんとするには、婦女に、忠君愛國の心を養はしめざるべからず。支那の詩に、君王城上建降旗。妾在深宮何得知。といふ句あり。君王たるもの、已に、敵兵に降參し、其の國亡び、其の城奪はれたる後までも、其の夫人たるもの、深宮に在りて、之を知らずといふは、豈、情なき

限りはあらずや。之を、我が國の夫人ならしめんには、決して、此の如き卑屈なることあるべからざるなり。封建の時に在りては、士人の女兒たるもの、薙刀を學ばざるものなく、之を學ぶは、畢竟、國難に臨み、其の君を護り、其の敵に備ふる意に外ならざりき。然るに、今日に至りては、世の女子たるもの、徒に、文字を覺え、讀書を解すといへども、年、や丶長くるに至れば、茶の湯を弄ぶか、琴を掻き撫で丶、太平の日月を樂しむのみにて、毫も、君に、忠義を立て、國に、本分を盡くすといふが如き思想あることなし。豈悲しむべきにあらずや。無用の人は、到底、社會に、地位を得ること能はざる道理なれば、か丶る有様にて、婦女の地位を高めんとするが如きは、木に縁りて、魚を求むる類にして、婦女の地位を高めんとならば、古の國風をふるひ起こして、婦女

たるものも、亦、國家有用のことに心掛くべし。さればとて、薙刀をふるひ、鎖鎌を弄べといふにはあらず。優美なる諸藝は、婦女の嗜として、吾人の、最奬勵するところなりといへども、又、常に、國家の出來事に注意し以て、忠君愛國の念を錬磨すべきなり。

論説

女堂心訓（其の貳）

長井行

健全上の規則

余輩、固より教育學に於いて、造詣するところありといふに非ず。況んや、一二の外國書を咀嚼したりとて、氣候、風土、飲食、家屋の異なる我が邦に適用

し得べきや否やをも考へざるべからず。されば、教育の方法を教ふるが如きは、余輩の力及ばずといはざるべからず。今は只、其の彼我共に通ずべきものを擧げんとす。

英人ロック氏は、十七世紀の大家にして、余輩の欽景する一人なり。この人の、教育に關する意見といふ書は、廣く我が邦人にも讀まれて、珍重せらるゝ高著なり。余輩も亦、聊この書中より、一二摘みて語るところあるべし。

健全なる身體に於ける健全なる精神といへることは、簡短にして盡くせるものといふべし。人生の幸福といふものゝ、詮するところ、この二者を兼ねたる外あるべからず。而して、身體、精神共に、生まれながら健全にして、他の補助を仰がず、天才によりて、身體の健全を以て、大事を成したる人なきに非ずと雖

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も、此くの如きは例外にして、十中の八九は、教育の力により、正邪の別、有用無用の人となるものたり。而して、幼稚の時に當り、余輩の注意に上らざる瑣々たる一小事にして、後來の大關係を遺すものあり。畢竟、人の運命は、水源の如く、之を東に決すれば、滔々として東に流れ、之を西に導けば、蜒々として西に向ふ。其の初の謹まざるべからざる、誠に此くの如きものあるなり。却て、ロック氏は、人間の業務を取り、幸福を求むるに於いて、最も要するところは、身体の健康に在り。之なければ、艱難辛苦に勝つこと能はずとなし、健康上に關し、大に述ぶるところありたり。而して、我が邦の風俗の異同より、斟酌すべきことと、及び關係なきことなきに非ずと思ふが故に、こゝには、前述べたる如く、其の一二節を摘録すべし。

扨ロック氏の格言ともいふべきは、左の如き簡短なる規則に在り。云はく、紳士たるものが、其の幼童を育つるに於いては、撲實なる農夫、又は中等の資産ある地主の子弟を育つるが如くすべし。といふこと是なり。

我が邦にても、近來、人情著く華奢に流れ、日撲實なる農業の如きは、却て人の嫌ふところとなり、商工業の如きも、眞成の獨立心ある、即我が邦舊來の武士魂ある實業家の、地を掃ひ、一攫千金を夢みて、山師の如きを事とする、一派の遊食漢のみ、時を得顏に跋扈し、而して、此くの如き類のものを指して、紳士と稱するを以て、吾も人も、これに傚ひて、人間に剛健なる獨立心、自助心などの失せたる今日、彼のロングフエロー氏の、田舍の鍛冶屋と題する詩中の主人公の如き武士魂あるものゝ、又見るべからざる有樣なれば、其の子弟を取扱

ふるも、さながら、昔時の大名小名の如く、蕩然として貴族化し、徒に其の供給を豊美にし、其の結果は、所謂、紈袴子をのみ繁殖せしめ、未來の國民を誤ることを少小ならざるなり。ロック氏のこの規則を、今日に行はんとするは、實に至難と雖も、余輩は、飽くまで、之を世の令夫人諸氏にすゝめざるも、亦時勢上已むを得ざるなり。

女子要言　第二篇（廿二）

三輪田眞佐子

以上の如き理ある故にや、昔日より、各國人種の、相互になす敬禮の作法を考ふるに、或は匍匐、或は叩頭、或は頓首、或は起立、或は危坐、或は注目等、樣々なりと雖、其の國の人民に取りては、各、敬禮作法なれば、必しも、起つが禮に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

限らず。坐するが禮なるのみにあらず。必竟、其の作法には、高尚と、卑俗の別ころあれ、悉、心誠の表示に外ならず。今日、洋人の握手と、我が頓首とを比して、以て、禮の本躰を異にするものと思はゞ、誤なり。然れども、獨、心、甚謹むと雖、未、一般の人の認むるに至らざるものは、敬禮と云ふべからず。故に、日本臣民たる資格に變更あるときは、ともかく、先、我が民人は、我が習慣に從ひて、頓首するを以て、禮となすべきなり。近來、我が女子も、洋人と、「キッス」抔をなす影響にや、互の挨拶にも、首を垂るゝ度、大に減せり。是、日本女子の本面目と稱するに足らんや。尚、以下、禮の要領を、三に概括して述べん。

第一　進退法度あるべし。　女子は、其の云ふ處、其の動く處、悉、天性の美徳に伴ひ、而して、其の、自行ふ規矩作法も、單に、冷澹不味にのみ、嚴正なる

にあらずして、一片の有情、掬すべく憐むべきものを良とす。若、衣帯齊はず、結髪亂れ、立つに律なく、坐するに序なく、口非禮を云ひ、亦、注目正しからず、而して、己、能く、禮を知れりと云ふも、人、何ぞ、之を許さんや。古書にも、行修言道禮之質也。或は、禮義之始、在於正容體、齊顏色、順辭令とあり。思へよ。諸孃は、禮儀正しきを以て、宇内に高名なる、淸き蜻蛉洲の女子たることを。必、海外の異風に感化され、特色の棣々たる威儀をな失ひそ。

第二　事の宜しきに從ふべし。初めて、女禮の書を繙くものは、日々行ふ千種万別の業に就き、逐一斯々すべしと、列擧あるを見て、如何にして、之を記憶し、且、實履し得んやと驚くならん。然れども、幸に、禮の基源は、天地と、其の節を同じうするを以て、事の宜しきに從ふと云ふ一理、以て貫くを得て簡なり。さ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れば、此の一理を知り、之を應用せば、千萬の末禮、盡悟り得べし。實に便なるかな。蓋、禮式の書も、悉、事の宜しきに適ふ作法を、事の後より集錄せしに過ぎず。即、式ありて、人從ふにあらず。人ありて後、式起こるなり。恰、文章は、文法に先だつものなれども、後進者は、遂に、文法より、文章を學び得るが如し。

今、一歩進みて、此の原則を、今日の女禮に適用し試みん。先、煙草盆進め方に就いて考ふるに、火壺をば、客の左の方に置き、而して、唾壺をば、右の方に置く如きは、自、喫烟者となりて考ふれば、忽、此の作法は、事の宜しきに適ふことを知り得べし。又、燭臺を扱ふにも、筋骨の不自由なる左手にて、竿を持ち、力量強く、運動巧なる右手にて、臺を携ふる如き、其の他、茶を吞むにも、右手を以て、茶碗を持ち、左手にて、其の底を助くる如き、或は、人々、互に行き逢

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ひ、或は、飯を進め、且喫し、或は、物品を受授する等、一切の作法に應用して誤らざるべし。世の女子、此の原則を知らずして、末節を學ぶは迂遠なり。吾が師星巖翁の詩句、俗儒只但演㆓威儀㆒。善哉林放問㆓其本㆒。を假り、茲に加へん。但、宜しきに適ふと云ふことを以て、便利主義の尊敬なきものと誤了するなくんは幸甚。

第三　自然なるべし。　女禮は、自然ならざるべからず。自然ならざる禮は、禮にあらず。例之ば、立つに、兩手を膝の上に垂るゝ如く、或は、障子、襖を開くに、左の方へ開かんと欲せば、右方に跪き、先、右手にて、引手を以て、少しく開き、而して後、左手にて、全く開く如く、自然の順序に由るべきなり。人爲の次第を以て定めたる儀式は、抱腹に堪へざること多し。乃、貴人に對して、膝摺

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の禮ありと雖、若、四疊半の室にて、二三人も、共に面會する等の時は、唯、敬意さへ表せば可なり。膝摺するに及はざるべし。亦、人に、物を進むるにも、如何なる物にも、現に有るものを、誠實より捧ぐるは、禮に違はずと雖、正になきものを、本意ならずも、求めて、而して呈するは、僞に近し。古書に、居レ山以二魚鼈一爲レ禮、居レ澤以二鹿豕一爲レ禮、君子謂二之不一レ知レ禮。と見えたり。即、禮は、自然を主とするとの意なり。

其の他、冠婚葬祭等の、本邦習慣上の儀式の大要は、必知り居らざるべからず。蓋、習慣上の作法は、外國人の目より見ば、感心するに足らさるものも有らん。然れども、何ぞ怪しまん。恰、本邦人より、外國の風俗を見るときは、亦笑ふべきものあるが如し。否、各、國に特習あるは、是、獨立國の本躰にして、益、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其の舊儀を守るこそ、眞に、國を愛するものといふべけれ。徒に、異邦の風を尊びて、我が國の俗を顧みざるものは、其の眼中、國家なきなり。而して、彼等は、一朝、妖雲飛びて、仰げば高き富士の嶺を侵すことあるも、厭はざる黨なり。亦、何をか云ふを要せん。故に、日本女子は、敢て、古禮に拘泥するに及ばずと雖、此等の大義を悟り、葬禮に、花を手向くる如き、唯、過度に至ることを制限するも、時風につれ、全廢するに及ばざるべし。我が婚禮に、三々九度の杯式を用うるも、歐米の禮にあらずと云ひて亂すべからず。諸孃、若、今の濁流に化して、刹那、此等の禮義を忘れんか。あはれ、數千萬年、輝々たる豊蘆原の此の國は、月暗く空凄からん。

史談

吉備の兄媛

松野操雄

たび人のやどりせん野に霜ふらばわが子はぐゝめ天のたづむら

とは、遣唐使の母なる人、わが子の他邦に使するにあたりて、詠みて與へたる歌にして、

世の中におもひあれども子をこふる思にまさるおもひなきかな

とは、紀貫之朝臣が、その愛子にさきだゝれて、哀しさのあまりに、詠み出でられたるものなり。いま、この二歌をよみて、誰か、その子を愛で思ふことの深きを思はざらんや、かく、親として、おのが子を愛で思ふことの深く厚きは、たゞに、遣唐使の母、紀貫之朝臣のみ、然るにあらずして、大方の親心は、皆かゝり。然るに、かへりみて、其の子を見ばいかに。富みては貧をわすれ、貴くしては、賤をわするといふ諺の如く、或は富み榮え、或は高く貴くなりては、その親を思はず、その兄弟を忘るゝに至るは、なべての世のならひなり。豈かなしからずや。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

こゝに、吉備の兄媛といふは、應神天皇の妃にして、吉備臣の祖御友別の妹なり。帝、ある年の春、難波の大隅の宮に行幸まし〳〵て、高き臺にのぼらせ給ひ、遠く、海山をながめさせ給ふことありき。この時、兄媛は、御前に侍りてありけるが、西の方をながめて、大にうち歎きけり。帝、こをあやしませ給ひて、いかなれば、かくは、いたく歎きかなしむぞと問はせ給ひければ、兄媛こたへ奉りて、妾、この頃、ふるさとの父母のことを思ひいでゝ、いと慕はしうなり侍りしに、今、かく、御前に侍り、西の方をながむるによりて、いよゝ戀ひしくなりて、歎き侍るなり。あはれ、願はくは、しばらく、國にかへりて、父母を省ひ侍らむやと奏し上げゝれば、帝、大に、兄媛が親を思ふ心の厚きを愛でさせ給ひて、爾、二親にあはで、年久しくなりぬるによりて、國にかへり、父母を省はまくほりするは、實にことわりにこそと宣はせ給ひて、之をゆるさせ給ひ、やがて、淡路の御原の海人八十人を召して、水手となし、船して、吉備におくらせ給ひき。かくて、帝は、兄媛が船に乘りゆくを、高き臺よりみそなはして、

淡路島　いや二ならび

小豆島　いや二ならび
よろしき島々　たかされあらちし
吉備なる妹を　あひ見つるもの

と歌はせ給ひて、名殘をしませ給へり。そのとしの秋、帝、淡路島に御狩せさせ給ひ、それより、つひに、吉備の國にみゆきあらせ給ひて、葉田の葦守の宮に移り居ませり、時に、御友別、その一族をひきゐて參りければ、その兄弟子孫を膳夫となして、饗奉らしめ給へり。帝、御友別の、つゝしみ深きを悦ばせ給ひて、吉備の國の縣々をわけて、その子弟等に封し給ひ、兄媛には、織部の縣を賜はりけり。それ、人の女の、遠くとづくものあれど、親のわかれを、悲しみ歎かざるはなし。されど、遠ざかるもの、日に疎しとの諺のごとく、後には、いつしか、故郷をわすれ行くは、常のならひなり。まして、兄媛は、大内に召されて、帝の御寵もめでたく、こよなく貴き身なれど、大方の女ならましかば、故郷こひしく思ふまじきを、常に、父母を慕ふ心ふかく、故郷の方を見るにつきて、一しは慕ひなげきける眞情、色にいで、聲にあらはれければ、實にこそ、帝、しばしもとゞめ給はずして　こをおく

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

らせ給へるなれ。

勇婦みよ女

森茂

本多中務太輔政武の室は、備前少將綱政の息女にて、心猛く力量あり、假りにも人の勇氣なるを好みしが、或時近習の女を抱へらるゝにより、數多目見に來る中に、青山百人町の同心の女みよといふが、內室の目に留り、彼の女を召抱へよと命せられ、局を以て何ぞ申立て候藝も有りやと尋ね聞しゝに、みよ申しけるは、別に何の業も覺ね申さず、私藝と申すは、元結をわげ申す事一藝にて候といふ、局もあきれはて女の元結わげる事は常の事なり、是を言立にはなりがたしと思ひながら、內室へ斯くと申上げゝれど、內室それはよき藝なり、召抱へよ、給金は拾五両に五人扶持は、家の極めなれど、みよ義は貳拾両に七人扶持を與ふべしと命せらる、退きて局は女どもとも大に笑ひ、世間に藝を言立つることはあれど、元結をわぐるをいひ立に奉公せるは珍敷事なり、それを望みて、高切米を出だし抱へ給ふ主人の心底こそ疑はしけれど、不審をなしけれど、內室は見る處ありてや、支度出來次第急ぎ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

引越せよと申付られ、約束の日に迎として、乘物脇添足輕中間を遣はしけれど、道具等先へ遣はしけるが、其品々を書付けて奥目附へ相わたす、簞笥一つ、半長持一棹づゝ、二荷、小袖櫃一つ、跡付一つ、兩掛鋏箱一つ、長刀一振、其外手道具等なり、女中は是を見て、口々に、さても元結の言立にて奉公かせぐには、猿引道具の入る物なりと笑ひ、又、薙刀を持する事、入らざる僭上者かなと嘲る處へ、みよ來りしが、乘物より出づるを見れバ、衣裳美々敷、うち掛に下髮にて、廣敷に通る、兩人の下女、一人は扇子筥、一人は袋に入れし大小を持ちて、跡につゞき居たり、下女端下まで是を見て、女がいらざる大小持たする事よ、用に立てたる覺えもあるまじきにと笑ふ者多かりしかど、みよは元來發明なる女なれバ、奉公に私なく、傍輩の心までも、能く察して勤めし故、主人の心に叶ひ、段々用ゐられぬ、或年土用干に、みよが虫干せしを見るに、部屋の内に小袖をつけ、其脇に蚊帳を釣り、中に具足を錺り置きたり、女中仲局是を見て、いかさま希有の女なりと笑ふもあり、醉興にも頼母しき心底なりと云ふ者もあり、此事内室の耳に入り、さぞあらんと思ひし故召抱へたるなり、案に違はず、天晴武勇の女なりとて、大に悦びぬ、或時、奥附の役人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

五郎八といふ者、亂心して、夜半ばかりに、廣敷にて、足輕仲間などに手を負はせ、夫より長局まで入りて、奥向へ切込みけるに、元來、五郎八、劍術に達しける者故、女の手に及びがたく、數多の女中、肝を潰し、うろたへ逃ぐる者多し、捕手の侍足輕來りけれども、奥向案内は知らず、殊にともし灯なく、廊下の狹き所なれど、身の働き、思ふ樣に成りがたし、五郎八何方にある、出でよ〳〵と聲々に罵れども、誰ありて踏込む者なく、時をうつす所に、奥の方より、みよ、騎馬提灯を爰にさし、長刀をもち、何者なれど、夜中に御寢間近く切入りしぞ、命知らずの大惡人、立ちさらぬかと聲かくれど、五郎八、是を聞き、推參なる女めと、刀を振りて切りてかゝる、みよは腰の提灯を廊下にかけ、長刀の鞘をはづし懸りければ、五郎八、進みより、しばし切結びけるが、みよ、すきを見て、手早く長刀を取直し、石突にて兩眼の間を突けど、猛り切たる五郎八も、眼くらみ撓む所を、兩足はらひて打倒し、聲をかけ、狼藉ものは仕留めたり、折合ひて捕めよと下知しければ、足輕數多はしり寄りて、繩を懸けたり、主人夫婦、大に悅び、我等が目鏡違はず、古人の巴、靜にもおとらざる働きなりと賞せらる、其後、内室はみよを呼び、劍術など心掛しならんと問へど、

初の程は押隠しけれども、懇に尋られしかバ、もだし難く、私、幼少より無外流の兵法を習ひ侍るよし申しけれバ、さこそあるべけれと感じたり、又或時、馬場にて、政武夫婦乘馬ありし時、みよも一鞍乘り候へと有りけれバ、畏り候と、馬乘袴を着し、地道を六七返乘り、夫より駈を乘りしが、預ねて用意やありたりけん、たけなが一枚を能き程に切り疊み、元結もなくなげ捨てけるが、二三遍の駈の内に、殘らず元結をかけゝれバ、主人をはじめ、傍輩の女も、さては言立にしたる元結は、あれにてこそあらめと、はじめて悟りしが、後知行百石を下されて、同家中堀川主水が妻となりぬ、

家政

育兒小言（三十七）

武谷水城

就學の事（つゞき）附學校の事

小兒就學する時は母親は夙に起きて、書冊墨筆等を調へ、少くも始業前廿分迄には、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

必ず登校せしむべし、後には小兒をして、必ず自ら書冊石盤等を調へしめ、他人を俟ずして出校する樣に慣れしむべし、科業果て丶家に歸らそ、暫く休息せしめて後、必ず其日學びたる科業を問ひ試み、其他敎員より命せられし事柄の有無如何等を尋ね問べし、之を終らぬ内は、遊嬉を許すべからず、

毎日復習の時間を定めて、其日に學び得たる事、其外從來學びたる學科を復習せしめ、母親自ら之を試むべし、若し不明の事柄ありて、小兒質問爲す時、母親にも亦不明なる時は、臆斷を以て答へず、己れ解し得ざる旨を聞えて、敎員に質問すべきを命ずるか、若くは自ら他人に質して後、明亮に說明すべし、若又已を得ぬ事故ありて、自ら試る事能はざる時は、兄姉等先進のものに代理せしむべし、一日も復習を怠らしむべからず、

總て學習及復習共に、一定の時間を定め、此時間に定めの科目を終へしむべし、此事日々の慣習と爲る時は、日科を大義に思ひ、或は怠る樣の事無るべし、是れより以上は、時間あるとも決して餘分に科すべからず、大抵家に歸りて復習する時間は、一時半乃至二時間許を適度とすべし、學校の授業半日なるか、若くは休暇の中は、適

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

宜に復習の時間を増すべし、暇中は大低學校の授業時間、若くは其三分の二時間程は、科業を命ずるを良とす、大祭日等は全く休科せしむべし、學科及復習時間の外は、勤めて小兒の精神を快樂ならしめ、教育と健康とに大なる妨無き限りは、兒童の爲んと欲するまゝに任せ、以て其天然の美を發達せしめん事を努むべし、總て讀書其外科業多きに過る時は、自然に精神の發達を壓し、身の成長を妨げ、成年の後、却て有用の材と爲り難し、加之讀書の如きは、餘り多きに至る時は、其讀方粗畧に流れ、意義を解得する事深からず、終には口に誦するのみにて、其事柄の何たるを明に解する事能はず、深く事物を研究する事難き性質を馴致するに至るべし、

小兒學校にて進級する時は、相當に褒賞して、益後來を奬勵すべし、假令進歩の鈍くとも、妄りに叱り懲すなどの事を爲すべからず、斯る時、妄りに叱る時は、却て奮發心を挫きて、進取の氣象を墮すべし、宜しく徐に、其進歩の鈍き故由を說き、例を引き譬を擧て、更に自ら悔悟發奮の念を生せしむべし、

小兒の學級進むにつけて、母親の教授を要する事は、次第に責任減ずれども、出來得べき丈けは、上級の課業までも助け敎ゆべし、特に就學中、其勤惰を監視し、復

習を考試する事は、何時も母親の任すべき義務にして、小學を卒業する間は、一日の如くなるべし、

學童中には、賢きもの、愚なるもの、或は行儀正しきもの、又風儀の惡しきものあらん、中には甚狡猾なるものもあらん、是等の監視は、教員の宰る處とは雖、母親たるものも、亦常に其兒の親む處のものに氣を附る事、肝要なるべし、狡智の兒童中には、例之バ他童の苦辛して案出したる算術の答解などを借りて、已れの勞を省く樣のもの、無にしも非ず、吾が兒をして、斯る行ひあらしむべからざるは勿論、他兒の吾が兒に對して、若し斯る所行ありしを知らば、其不正の事柄たる故由を能く說き示して、嚴に故なく他人に借す事を禁ずべし、時として、我より年長なる狡智の兒は、脅迫樣の手段を以て、右の如き所行を爲すもの無きに非らず、母親たるもの、此等の事實を知るも、已が兒の教訓のみにて救ひ難きを知らば、教員に實を告ぐべし、もし斯る事柄を其儘に捨置時は、已れ亦時に他の助勢を借るも、妨なきものと心得、終には彼我共に同じ結果に陷るべし、其他小兒が、他の學童の事など訴ふる事あるとも、妄りに受附べからず、疑はしき事柄は、教員に問合せて可なり、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家裏の感化と教養とは、小兒一生涯の根脚と爲るものにて、終身盡る期無しとは雖、其感化と教養とを、直接に受る時期は、亦自然に止む時あり、此時、之に繼ぐものは、則學校の教育と、朋友伴侶相互の感化とにして、中に就て、學校の教育は、其勢力の至大なる事、今更に論ずるを俟たず、小學校は正に此兩期の中間に堺するものなり、されバ、小兒家裏の感化教養、善良ならぬものは、學校の教育方善良なるも、之をして善良に移らしむる事難きが如く、若し學校の教育方にして、(教る人も、學ぶものも、不知不識の間、氣の附かぬ裏にとは云ひながら、)苟も國の特性に背く樣の事あらんか、從來受けし家裏の善感化、善教養も、亦其勢を失ひ、不知不識の間に、人の子を賊ひ、國の礎を壞る、近く鑑み、遠く慮り、效を現時ニ期し、功を百世に期すべきもの、天下いまだ幼童少壯者の、教育の右に出るものは非るべし、家國は人に因りて成敗し、人に由りて興亡す、人は一度幼童と少壯とを、經過せざるべからず、一度家裏と學校との、教育を受けざるべからず、此事猶育兒の結果に關す、言の玆に及べる所以也、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

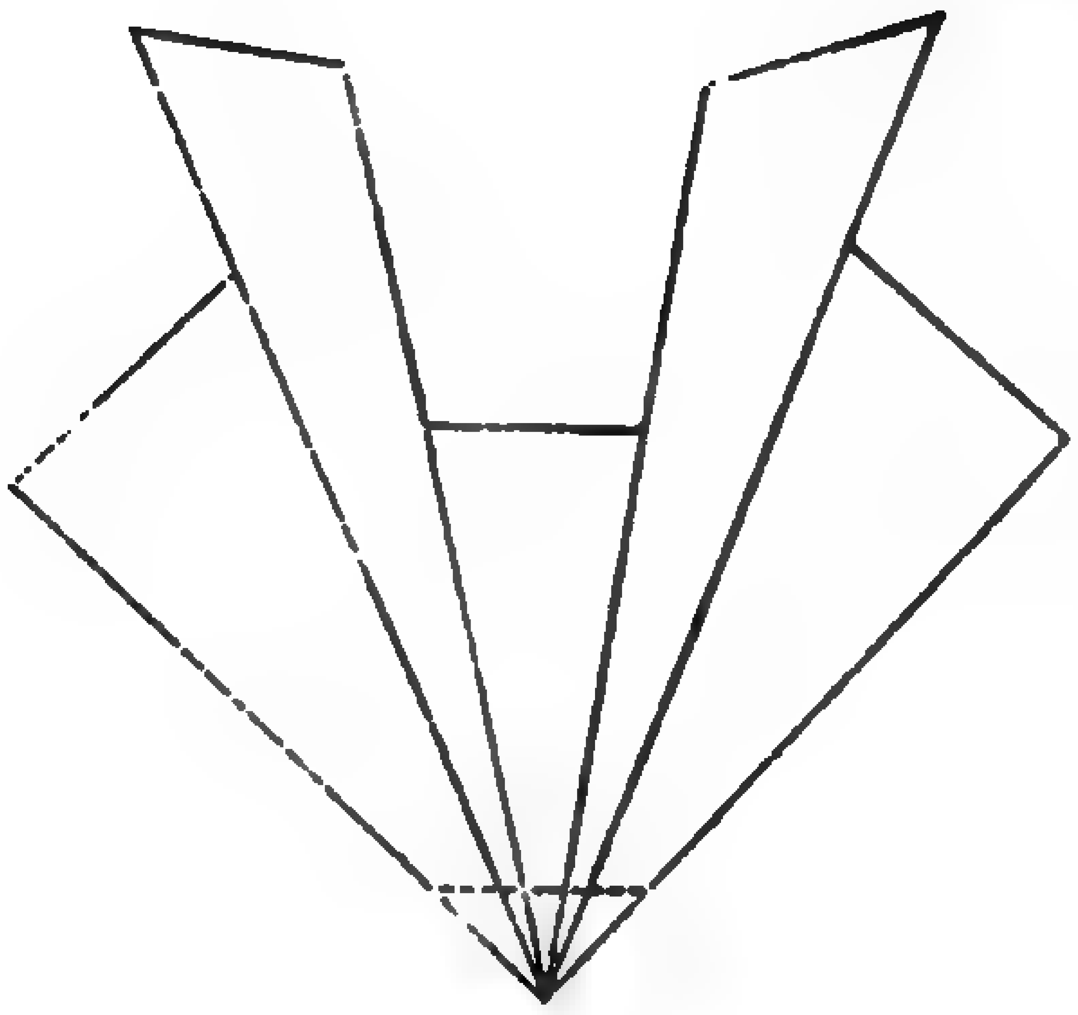
折形（三）

有住齋

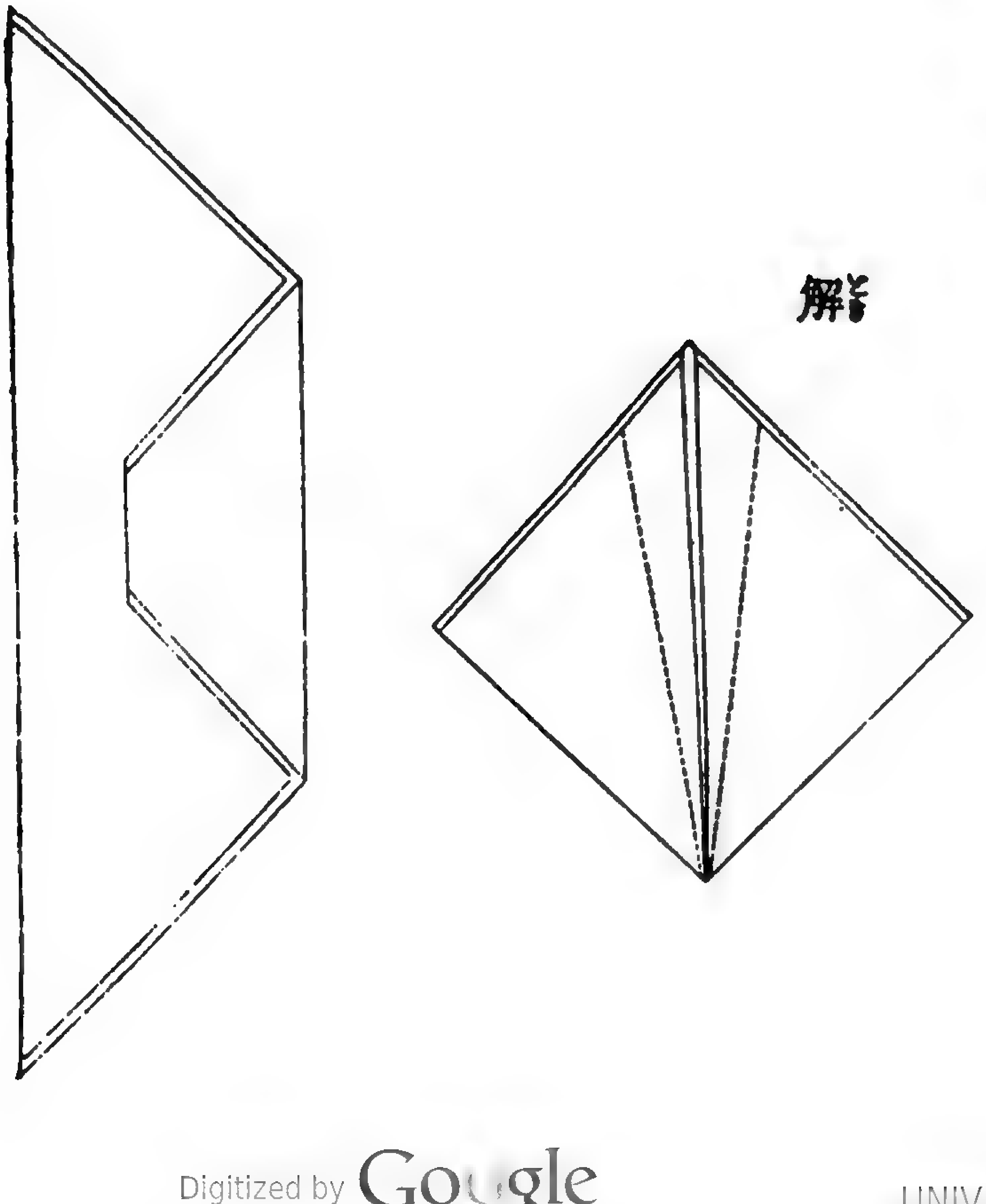
一山椒胡椒の粉包

饂飩、素麵などの、膳に付る也、水引掛けず、臺付もなし、

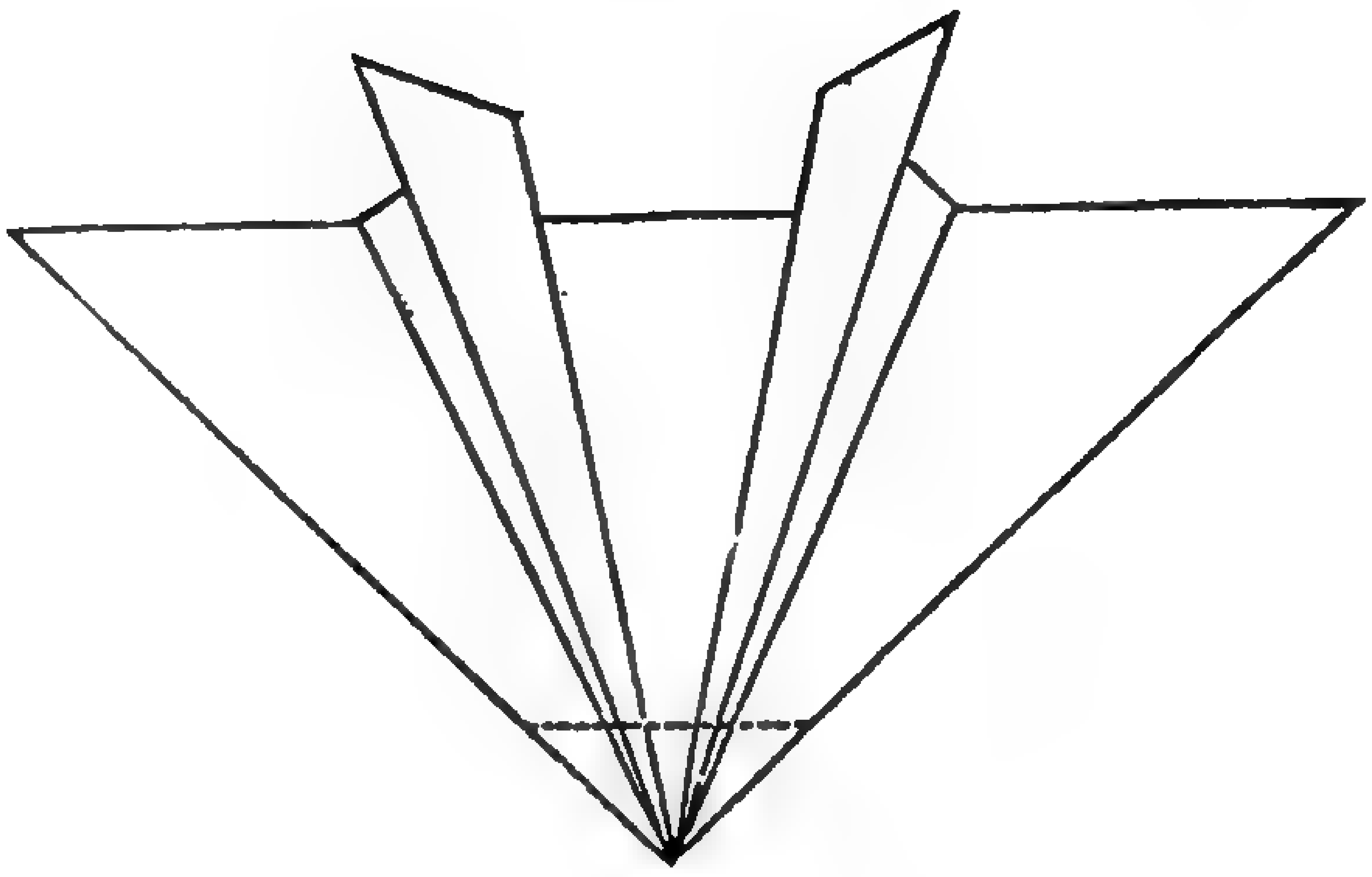
山椒包



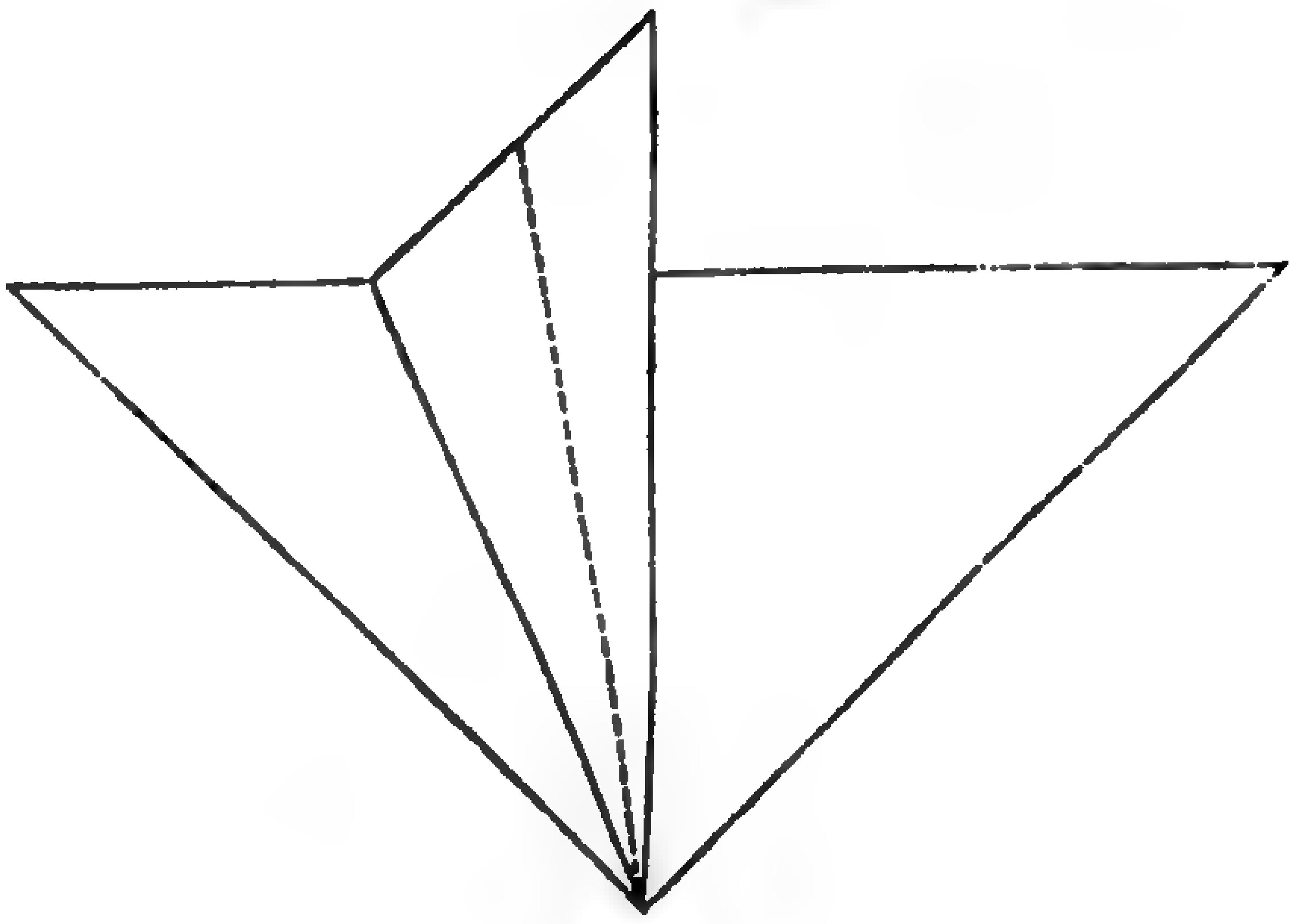
解



胡椒包

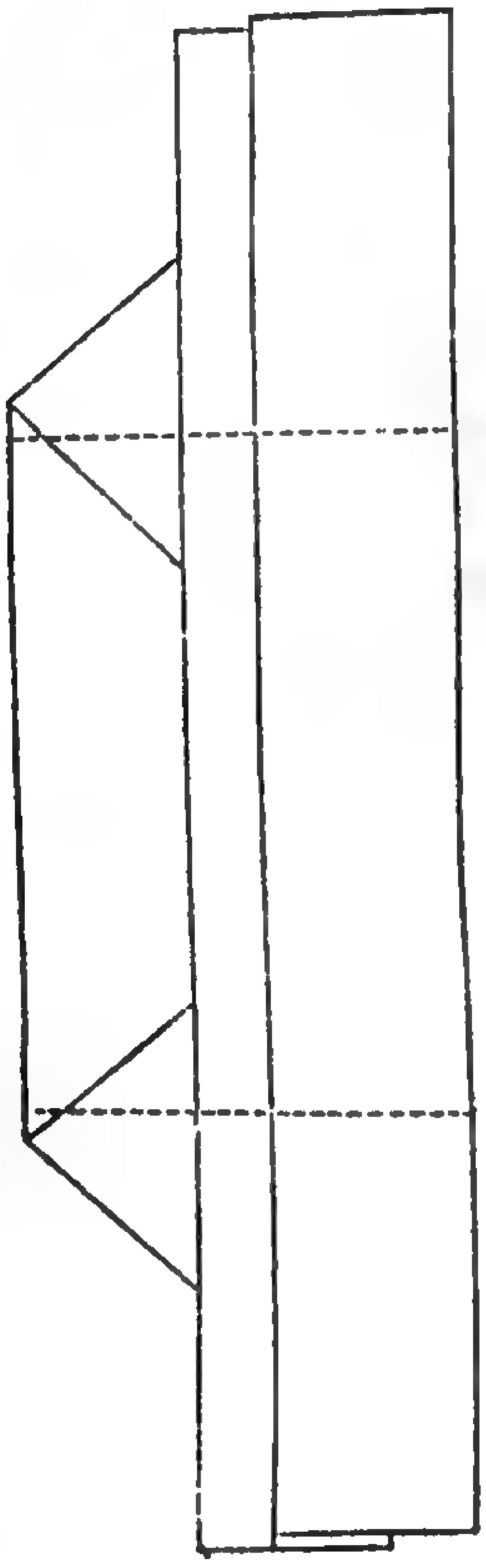


解



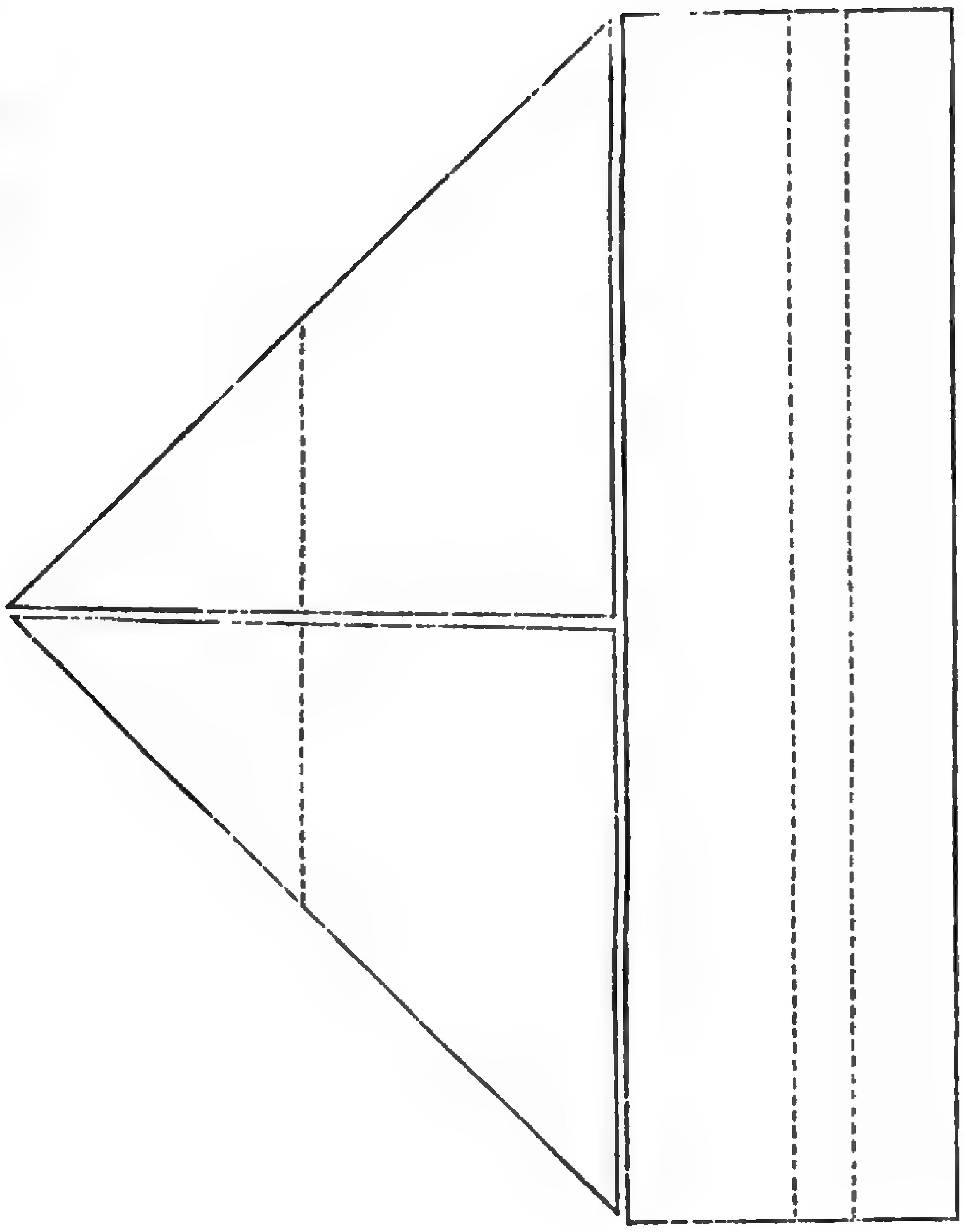
一金銀包

書付、初の襞にすべし、白銀は何十兩、又銀子一枚、金何百疋などゝ書べし、



金銀包

解



看護法捷徑（二十七）

三笠舍主人

第三編　救急法（つゞき）

（七）創傷（續き）

十一　骨の一部挫折するを骨傷と云、小兒の骨は軟かにして彈力强く、又壯年の徒は、骨質堅くして容易に骨傷を蒙らず、瘦肉の人、特に老人は骨質脆くして摧け易し、

十二　骨傷に純骨傷と雜骨傷との二種あり、皮膚に創なくして、獨り骨のみ折傷するを、純骨傷と云ひ、皮肉も共に破るゝものを、雜骨傷と云ふ、純骨傷は、通常經過良なれども、雜骨傷は汚物創面より入り、骨及皮肉の摧けたる面に附着するが故に、危險に陷る事多し、

十三　健側と比較して、病側の肢短縮、若くは屈曲すると、關部に非ざる部に、異常の運動あると、（他より動かして）患部を摸索するに、一種の劇病あると、患部を試みに移動するに、一種の軋音を聞く時は、（或は手に感ずる事有）其部に骨傷ある の證なり、

十四　骨傷の治癒は、折れたる骨端を、故の位に直して接合せしめ、次第に新骨を生じて、骨端互に癒合して堅牢となる迄、此位置を保たしむるに在り、此等の法は、固より醫に非ざれを行ひ難き事なれ共、看護者亦之を心得置く事肝要也、

十五　故に骨傷ある時は、適宜に常の位置に復せしめて後、（痛みあるものは妄りに復

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

すべからず、其外總て妄りに動かすべからず）安靜に保持すべし、或は運搬を要する時は、假に適當の繃帶を施して、運搬の際、傷處の動搖するを防ぐべし、但、骨傷には動搖を防ぐが爲、必ず。副木とて、一種の長形扁平なる木莢を用ゐて、其上より繃帶を施すを規則とす、繃帶及副木の事に付ては、述ぶべき事あれども、多くは醫の施すべきものなれバ、今は畧しつ、

十六 骨傷の有無判然せざる時は、假りに骨傷あるものと見做して、處置すべし、骨傷は上に述べし安保の外、他の創傷と同く、十分患部に氷水罨法又は冷水罨法を施して、醫の處置を俟つべし、

(八) 毒創 附 咬傷

一 諸種の創傷に兼て、毒物の體内に入るものを、毒創と云ふ、例之バ、屍毒、(屍を取扱ふもの、誤て指等に小創を受る時は、屍毒と名る一種の毒、玆より身に入りて危險の症を與す事少からず、）箭毒、（簇に毒を塗りたるもの、）又狂犬、毒蛇、其他毒虫の咬傷、等も之に屬す、

二 總て此等の毒創は、其傷假令小なるも、毒質速に創内に入り、其部に循る血管、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

又は水脈管と名くる小き管より吸收せられて、心臓内に入り、血液に混じて全身に循り、全身に毒害を及ぼして、甚危險なり、故に毒創を受し時は、毒質の吸收よ先立て、速に創内の毒質を除くを最も必用とす、

三 其法は、先づ口にて創處を嚙みて、（或は亂切するも可也）毒血を吸收し（口内唾液中にては、毒の力を逞する能はず、）又は刀にて其部の皮肉一片を切去し、十分血液を吸取して後、火熱にて燒灼し、又は強き腐蝕藥を用ゐて、創口を腐蝕するを良とす、

若し受傷後、稍時を經たるものにして、特に蛇毒の如く心臓の機能を害し易きものは、多量の酒類を與へて、病者を酖醉せしむるを良とす、

四 毒創四肢にある時は、速に創の上部を帶等にて強く括り、更に小なる棍等を帶下に狹み入れ、帶を數回廻綢して、毒質の血行中に入るを防ぐべし、

五 總て毒創を受たる時は、前の救急處置を施すと共に、速に醫の診を乞ふべし、

學園

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

文學小傳（第三十六號續）

難波津淺香

宗祇

余が文學小傳を述べたるのち、目黒氏の女子文學傳を載せられたれば、同じ趣なる事の重なるも如何とおもひて、差扣へをりしに、此頃、目黒氏は、親のおもひにあたりて、こもりゐて、筆とり給いぬとか承れど、久々にて、舊稿をかきつゞくる事とはなしぬ、

宗祇法師、俗姓は三善、苗字を飯尾といふ、自然齋、見外齋、又種玉庵などの號あり、紀伊國の人にて、伎樂師の子なりとか、少き頃、僧となりしが、生れつき、和歌を好みて、壯年の頃、猪苗代兼裁といふ連歌の宗匠につきて、之を學ばんことを請ひしに、兼裁答へていはく、連歌は、たやすく學ぶべき事にあらず、今十年も若くまさば、たよりよからんをと、宗祇いはく、さては、此後十年の間、晝となく夜となく、勉め學ばゞやと、兼裁、大に其志のあつきを感じて、能く其道の事ども、殘る所なく敎へけり、足利時代は、天の下亂れて、學の道すたれたりしかど、只この連歌のみは、和歌にもまさりて、弄ぶ人多かりき、兼裁、其中に秀れて名人なり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しかも宗匠と仰がれて、弟子も多くありしかど、宗祇に及ぶもの無かりき、宗祇は、生れつき、其道のすきびとなる上に、師の懇なる教を受け、他心なく、其道に思ひをこらし、又國々を巡りて、あるは名高き山にのぼり、あるは大なる川をわたり、はた、古きあとをたづねて、其上をおもひやり、勝れたる景色をながめて、其趣を心にさとり、之を詞につらねて、連歌につくりなしゝかば、其巧なること師にもまさりて、其譽れ永く世に殘りぬ、

抑連歌といふは、もと一首の短歌の上の句と下の句とを、二人にてよみしことなれど、此頃は、それを、數人にて、數十句連ぬることゝなれり、昔日本武尊の、東北の蝦夷を討ち給ひし歸り路、甲斐國酒折宮にて、ある夜、

にひばり筑波をすぎて、いく夜か寢つる、

と詠み給ひしかば、松明をとりて御前にありし翁、御歌のあとをつぎて、

かゝなべて、夜には九夜、日には十日を、

とつけ奉りしを、連歌のはじめとぞいふなる、されど、和歌のことを、敷島の道といふにならべて、連歌のことを、筑波の道ともいふとかや、奥州前九年の合戰に源

義家朝臣、阿部貞任がたてこもれる衣川の舘を攻めおとして、貞任のおち行くを追ひすがりて、弓に矢をつがひ、

衣のたてはほころびにけり、

とよびかけられしかば、貞任、

年經たる糸のみだれのくるしさよ、

とつけしかば、あはれとおもひて、矢をはなたざりしとぞ、是も亦連歌なり、

さて、この連歌、鎌倉の頃より盛りになりて、南北朝のとき、二條良基公、其法式を定め給ひ、又菟玖波集とて、連歌の集をも撰び給ひき、是より盛に行はれしが、宗祇法師に至りて極まれり、天子之を賞して、花の下の號を給はりき、之より、其宗匠を、はなのもとゝぞいふ、宗祇は、連歌に秀れたるのみならず、東常縁といふより、和歌の奥義をも受け、又卜部家に從ひて、神典をまなび、共に其旨に達せり後柏原天皇の文龜二年七月晦日、相模國函根の湯本にて寂す、年は八十一なりしとぞ、其墓、今、駿河國桃園といふ處にありといふ、

宗祇は、香をきくことを好み、鬚を、いとうるはしくのばせり、これ鬚の中に、香

氣をたもたしめん爲なりとぞ、然るに、あるとき、山中を通りしに、强盜出で、衣服荷物を奪ひ去り、猶其上に、鬚をも取らんとす、何にするかとたづねしかば、京に持ち行きて、拂子つくりて賣らんといひぬ、宗祇、乃ち和歌を詠じて曰く、

我が爲に拂子をかりはゆるせかし、ちりのうき世を捨てはつるまで、

と、賊、其歌に感じて、先にうばひしものをも返しあたへてさりしとなり、宗祇、又茶の湯を好み、書をも善くせり、其著書に、筑波集、吾妻問答、竹林集、筑紫道記等あり、筑波集は、勅を奉りて撰びしなり、弟子の宗長も、亦連歌の名人なり、

漫録

沖繩縣下三十一日旅行日記

まゝく庵主人

われ、常におもへらく、大凡、世の中には、財寳もてるもの、妻孥ともなひたるもの、ばかり、可憐なるはわらじと。是、決して、財寳、妻孥もたらぬよりして、かく、まけをしみをいふにはあらず。惟らく、わがいふことを聽き給へね。まづ、妻孥ともなひたるもの、或は、心を懸

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

むるよすがとなることあらむも、それ、中々に絆となりて、興ある席に出でゝも、猶、最早まからむ。子泣くらむ。その彼の母も、吾を待つらむぞなど、うちかこつめり。財寶もてるものは、いかに、往時寺小屋にて習ひけむ、倉庫の中の財は朽つることあり、といへる實語教のことむを忘れたらば、暫時が程は、人の阿り來るをば、樂とも見るべく、人の強ひて追從いふをも、うれしと聞きもすべし。火災なかれかし。盜賊の入りもやせむ。若し騙奴などあらむ、いつかは心をやすむる。果ては、たれは騙奴にはあらぬか、彼は金よく借るなど、あらぬ人をさへ罵りさわぎて、他人の身の上にまで、心をなやます。あはれ、財寶もたらず、妻孥ともなはず、心のまに〳〵ゆきかへり、樂しみ悲しふには若かず。われには、固より財寶なく、妻孥あらず。世の中、總べて心のまゝなり。唯、父上、母樣、さては、兄、姉を、遠く故郷にのこしまゐらせしばかりこそ、常に心をよわむる媒とはなれ。今年四月の下旬、はじめて、この縣に來りし時、故郷の人々は、外國へなどゆきたらむでと、歎き給ひけらし。如何なるところぞ、かよわき身体にてなど、度々いひおこせ給ふ。七月十五日、學校のこと、よろづ去卒へき。六十日無事にてあらむは、中々身體をよわらすべし。運動かねて、國頭地方に旅行し、故郷近きところにゆきて來むと。

十六日　午前九時、寓所をたちいづ。路すがら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

下國君を訪ふ。種々途のほどにつきて心づけられたりき。學校にも立ち寄りたるに、同縣人小玉君來あはせぬ。路のほど注意してよ。いみじう暑きに、事なくておくり給へなど、いひもし聞もすれば、さすがに旅立の心地せらる。旅のいでたち、觀音堂、千手觀音、ふしをがみて、こがね酌とて、立ちわかる。はかなげにもうたひつるものか。午前第九時か、いみじう疾き門でなれど、袖にふる露などは、思ひもよらぬこと、大道松原ばかりは、いつもながらの松風、樂をかなづ。やがて崇元寺につきぬ。この寺には、鎭西公の于舜天王のをはじめ、代々の國主の靈牌をおけり。又鎭西公の用ゐ給ひしといふ矢一筋あり。われたるさま、さびたるさま、古代に貴し。こゝの住持は外がちにて、大方内にあらずと、むさくるしげなる下男が、ことなげに持ちいづる。うたて腹だゝし。昔はかくもあらざりけむを。

松風のおとぞかりなり崇元寺

年ふりたる松ヶ枝のみ、いと所得がほなり。酒井豊雄來る。お向にまゐらむずれば、金武わたりより、手紙おこせ給ひてよなど、契りて別る。添浦間切内間村の或家にて、晝飯の料にとて芋を乞ふ。膳に山盛出せり。錢少しおきたれど取らず。强ひてやりて、やうやうをさめられてき。かくやうに辭退するが、この地の習慣なりと。三時すぎ、宜野灣番所に着く。玉那覇徹は、この村のものなり。來りて何かと周旋す。かたじけなきことなり。番所より西南にあたり、一里ばかりの所に、戰鼻と

呼べる森あり。昔浦添メーマトと、銘苅司と戰ひし古跡なりといへり。浦添メーマトは、武勇勝れたる人にて、この戰にも、銘苅司が勢こむで放ちし矢を、口にてくひとめ、嚙み碎きすてたりとて、今にこゝらあたりの物語ぐさなり。又銘苅司も、超凡の豪傑なりしと。この人、遂に天上せしといひつたふ。墓は眞和志間切の銘苅に殘れりと。その墓に、葛などはひかゝることあるも、皆三寸ばかりにて枯る。これは、銘苅司の威德の然らしむるところといひ傳ふ。暮近きころより、銅羅の音うちきこゆ。何事ぞと聞けば、明日の綱引の用意なりと。古よりの習慣にて、六月の中にて、人々の都合よろしき日を撰び、年に一回小兒綱引を行ふ。簪一本さすものにて用だつべき限りは、皆出で、引くなり。この地にては、簪一本なるをも、ウシリーといふ。このウシリー十四五歳、家貧しきは十七八歳にて、髮をかたの如く結び、簪を二本挿すなり。これより廿四五歳までを、二才とよぶ。さて全村の少年、前後の二ッにわかれてひくなり。わけかたは、元來この村は、全村を百八十地に分ち、二十地を以て一組とし、即ち八組より成り立てりと。故に一の組より四の組までを、一團とし、以下を一團とするなり。又前といひ、後といふ由は、習慣にて、家は必ず南に向けて作るなり。總べて南の方を前といひ、北の方を後といふ。今日は前後の少年、二所に集りて綱を作るなり。藁かつぎ走りあるくさま、いとおかし。彼のかしましきまで聞ゆる銅鑼は、即ち少年に集れと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

號令するなりと。前の綱つくるところにゆきて見しに、幼きものどもまで、皆いそがしげなるさまなり。目につきやすき所に、アヲニバーのいたいたしげなる根に、縄くゝられたるがかけられたり。これは少年頭とて、前後各二人づゝあるが、そのもの、管理するものなりと。即ち後れて來るもの、來ても怠るものなどの尻をうちて、懲戒するなり。時には、鮮血淋漓たらしむることもありといふ。この夜二時ごろにやありけむ。玄關をわるゝばかりにうちたゝく音に、目さまされて聞けば、中頭役所の御方御二人、御巡回の御路に泊らせ給ふなり。まどひ起き走りいで、何やかや丁寧に申しあげ、却つてエゝ氣ノキカヌ奴ジャナト罵りとせさる。番所の吏員といふものも、又ひとかたならぬ心づかひのあるものなりけりと、いとおはれなりき。　（つゞく）

三卿三說（承前）　松野操雄

鹿を信實朝臣、

秋の野のをざなにまじり鳴く鹿の
　色にやつまをこひわたるらん

本歌　秋の野の尾花にまじりさくはなの
　色にやこひん逢ふよしをなみ

薄を、中書王、

はなすゝきおほかる野邊のから衣
　たもとゆたかにあき風ぞふく

本歌　うれしきをなにゝつゝまんから衣

袂ゆたかにたてといはましを

古歌をとる躰、以之可被交合歟、假令、又、おき所あらためたりとも、二句までをむ、是をゆるす、三句まで、本歌のごとく、つゞけん事は無念也、一句なりとも、肝要をとらむ、定めて本歌ときこゆべし、一首を、さながらとるとも、枝葉にかゝらむ、定めて本歌ときこゆべからず、又、古歌は、贈答したる躰あるべし、有といふに、なしといひ、みるといふに、みずといへる、これなり、

古歌
心あらん人に見せばや津のくにの
なにはわたりの春のけしきを

是を答へて、故禪門、

かすみゆく難波の春のあけぼのに
こゝろあれなと身をおもふ哉

心あらん人にといへるを答へて 我心あれなど、贈答せられたる無比類もの歟、故禪門、旅宿嵐を、

草木ふくむべやまかぜを聞きしかば
たかねの袖はなほぞしをるゝ

本歌
ふくからに秋の草木のしをるれは
むべ山風をあらしといふらん

又山家を、

いつとてもかるゝ人目の山ざとは
草のはらにぞふゆをしりける

本歌
山里はふゆぞさびしさまさりける
ひとめも草もかれぬと思へば

是等は、皆以同之心詞、本歌に立勝るをや、具觀房贈答云、

人をこそまたでもあらめ曇れども
いかゞおもはむあきのよの月

本歌 月夜にはこぬ人またるかきくらし
雨もふらなんわびつゝもねん

かくのごとくならば、誰人か贈答せざらん、心といひ、詞といひ、強不珍重、たゞ理をのみせめて、無殊興歟、此外、心をとりて、不取詞之躰有り、又心をとらずして、さながら、姿をすてたるさまあるべし、事しげきによりて、委細しるさず、

一初五文字によりて、歌は、こはくも、ゆらめきも、きこゆる也、當流には、肝要を、初五文字におくゆゑに、探題を讀む時も、五文字をのこして、後はかく事のあるによて、五文字のかき所つまりて、注付などをしたるやうにみゆることと侍り、當流の人のよめるさぐり題と、みえる事侍り、又五文字は、目鼻よき面にむかへるがごとしと、ふるくもいへり、又五文字を置得ずして、胸の句へよみわます事あり、殊に心不快の躰也と云々、其外、近代このみよむ人侍るをや、又古名歌の五文字をゝかしつれど、披講の時、耳にたつこと有り、されど、京極中納言入道も、櫻ちる、月やあらぬなどは、よむべからずと申され侍りけり、又五文字の終に、やといふ歌の躰あり、聊有子細、或は名所、或は神祇などに、其子細をいひあらはさんとておく字也、無用におくべからず、

一上句に詞をつくし、力を入れつれど、下句かな

らずよみにくし、連歌と歌とのかはる事、このいはれなり、連歌は、一句に心をいひはてたるに、後句を求めつくるによりて、連歌うたとて、こはくきこゆるは、此いはれ也、上句は、少々おとりたれども、下句に理かなへば、よき歌也、下句、上句におとらで、秀逸の躰にあらず、已上如件、大概注之、

和歌秘密相承條々　　前亞相在判

右五ヶ之抄物者、七通抄之内、書抜者也、尤秘藏他異者共歟、

寛文六年卯月上旬書之　　良世

（以下の奥書は省略）

右重々、奥書在之本以、校合畢、

貞享元年甲子九月中旬

主一堂宗川在判

千世の濱松（二）　　樂宮

これは、前號にのせたると同じをりに、徳川十二代の將軍愼徳院家慶公の御臺所樂宮の作り給ひしなりとぞ、樂宮は、有栖川宮の姫君なり、

又（二）

葉月の末の一日、濱の殿へまうでむとせしところ、折あしう雨風いかづちの響あらましうさのまゝ、君のおつき言の葉をそへ、やみ侍給へども、頻に雨やまざりければ、はいなくも相やみぬ。殘多さひとかたならで

けふ過ぎば又いつとはむと計りを
　思ひかぞへてわめぞうらむる
同月末の、三日頃しも空さだめなき時雨、空もさ
たゑに雲晴て、けふは心嬉しと、とく立出る、道
すがら、又はのくらき處々に、虫音いとゞ靜けき、
かたはしはさも武士の家づくりたる、うるはしさ、
こなたかなた、珍らしく思て、
　あづまぢに思へば花のみやことは
　　又ひときはのよそひをぞ見る
輿の内より、なぐさめつくしなし、又目なれぬ下
下の賑はひも、いと面白く、めづらかに、犬の聲
なぞ、まぢかく聞ねて、旅路のことども、なつか
しう思ひ、ほどなう濱の殿へ、いたりぬれば、朝
日のかゞやきて、むかふ御池の、いとすさましう、

水の面は筆も言葉も、盡しなき風景と打詠て、
　秋風にさゞなみよするいけの面は
　　ながめはてなき水のおもしき
それより松の腰掛となんいへる所に立より、君よ
り給ふ、わせとりと扇を、ものゝ名にして、
　小山田のわせとりどりの君が惠も
　　わふぎて千世も手に任すらし
其處を過ぬれど、釣の糸おもしろかりけるまゝ
に、口ずさみて
　釣の糸かゝるつみともおもはしな
　　棹のひまなくこゝろひかれて
海手茶屋よりむかふ海原、いくもゝ千里、わきま
へがたく、波靜に、かしこくも、よき折りをえて、
君の御船　渡らせ給ふる風もなぎて、いといさま

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しと、みすの内より、ほのみ侍りて、

君がけふあそぶ御船のいでしほの
さしつゝうたふ聲いさむなり

漁師のあみうつを、めづらしと見て、

船人のけふうつあみのめづらしと
こなたかなたに漕出だしける

御舟過ぬれど彼是ものがたりしける程に、御使ありて船形の烟草盆、給ふかしこさに

淺からぬ折をたくみにきざみなす
一葉のふねのさしもあふがむ

かくこまやかなることども思ひて、

此の君が海よりふかき御こゝろを
みやこの人にたよりきかせむ

夫より新錢座通り行に、前に面白き賤屋をみて、

かやぶきの軒はふりぬる松の音を
そのまゝ窓に見るもめづらし

行まゝに程なく庚申堂を拜みて

誰も寐ず夜を明じなむものすごき
こがくれながらこゝに籠りて

夫より新錢座まやすらひて

こゝはまた鄙のけしきを移してや
とりどり賤がしごとをぞ見る

御亭山といへる、海手の後なる、夕日のさすにまかせて、帆の數々みわけれバ、

濱風もなぎしゆふべのうなバらに
千舟もゝふねとめてこそ見れ

夕つかた、君の御舟下し玉ふるを、見奉りて

夕日さすひかりになみの末晴れて

御舟さしかへる名殘をぞ思ふ

秋の日のみじかきまゝに、程なくたそがれに、なりにけれど、かへさ近しと思ふ、名殘りいはんかたなくて、

暮れなむと思ひのこしていさ濱の
浪とともにぞ立ちかへりぬる

門田のさなへ（つゞき）

よしのなる、なつみの川の、河よどに、鴨ぞ鳴なる、山かげにして、

ある公の御むすめのもとへ遣はるゝ消息に、此歌を書き出し給ひて、仕う奉る人々の、うち〳〵隱れてなすわざを、強ひてとがめ給ふことなかれ、山かげの隱れたる川よどには、（川水のよどむ所をいふ、）鴨もままになくなるものぞと、思し召せと教へ給ふ、思ふに、自は、うらうへかげひなたなく、心を直く身をまさしくもたんと、明暮愼むべし、人の上は大やうにて見ざれば、つかはるゝものなし、世の諺にも、角なる器に入りたるみそを、すり木もてとるやうなるべしといへり、楊枝やうのものもて、隈々まで殘りなくさらへとる如きをにくむ也、もろこしの老子といへるうへにも、大國を治むるは、小鮮を烹る如しと見えて、小魚を烹るに、かき交〳〵すれどくだくる也、殊に女は心狹きものなれど、隱れたるをあばきて、父母にも夫にも訴へ告るやうの事多し、告らるゝ人はいふに及はず、それをきく人、すこし心あるは、中々淺ましと思ふべし、或は思はず父母にも夫にも怒らせ甚しう

ては家の内の亂のもとにもなるべし、よく心得べし、されどもまた事によりて、其非を正さでは叶はぬこともあらん、一かたにはいひ難し、

春ののに、あさるきゞすの、妻こひに、おのがあたりを、人にしれつゝ、

春の野に求食（くひものをもとむる也）きゞすの、しげき木蔭かすかくれなどにひそまりてをれど、おそれげもなさに、妻戀してほろゝと鳴くにより、狩人のためにあり所を知られて、命を失ふとなり、萬に愼しをわすれなば、禍にあふ事雉子にひとしかるべし、男も女もよく常に思ふべき歌なり、

そへにとて、とすればかゝり、かくすれば、あないひしらず、あふさきるさに、

此初五は説々あれど、まづ大方に心得べし、そうなりとて、とすればかくなり、かくすれば又いひもときがたく、あなたこなたとなる也、あふさきるさは往來をいへど、こゝの意あなたこなたと解くべし、世中の有樣、昔も今もせんかたなきものなり、思ふ事叶はねこそ、うきよなれともいへり、唯堪へ忍ぶことをつねと思ふべし、佛書には此世界を堪忍土とも有るとかや、

世の中は、何がつねなる、あすか川、きのふの淵ぞけふはせになる、

飛鳥川の淵瀬定めなき如くに、昨日は綾錦にまとはれし人も、今日は肩をふたく計の衣だにも得難く、又その日のすぎはひ、妻子をはぐくむにも堪へじと見し人の、家たて並べて、勢猛にのゝしるも有り、されば富めるもまどしきをおもひて、い

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つもかゝるものと、たゆたひて貪るべからず、貧しき人も巳を脩めつとめを怠らず時を待つべし、又富める人まどしきを侮るべからず、まどしきを媚び諂ひて貪る道なかるべし、かれもこれも時うつりて身のさまかへりゆかむ、いかにはづかしかるべき、

わびぬれば、身をうきくさの、根を絶えて、さそふ水あらば、いなんとぞ思ふ、

これは小野小町の歌にて、文屋の康秀が三河の掾になりて、あがた見には出で立たじやといひやれりける返事によめるなり、詫ぬれば、世に有りわびぬるなり、身をうき草の根をたえては、根なき草の落ちゐざるさまにたとふ、誘ふ水のまゝにいきなんと思とは、康秀の誘ふ意に答へたるなり、

小町はさしもかはかたちめでたく、才もまた類なく聞ゆるを、時移り色衰へて世にわびたれば、こそ、康秀も田舎を見には出でたゝじやと、たはふれがてらに誑かし、自もさそはゞ行なんといへるはあはれなり、すべて女の若き程は、塵もつかじと身をもてなし、明くれ唯かはかたちを粧ふに遑なく、鏡のかげをたのむからに、年老たる人を見ては、淺ましとのみ思ひて、己れが身もまた幾程なくかゝらんといふ事を志らず、母志うとめの仕へもおろそかに過すたぐひも多かり少壯いくばく時ぞ老をいかんと、朱文公の勸學の辭にも見え、たゞ過ぎにすぐるもの、帆あげたる船、人のよはひと、清少納言もいへり、

かすみつゝ、花ちるみねの、朝ぼらけ、後にや風

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の、うさも忘られん、丹後といへる女房の歌にて、先達も殊によき歌といへり、うちかすみたる朝ぼらけ、吹風につれてちる高ねの花の、風情はもいはずおもしろきを、散はてゝ梢さびしくなりなん後は、誘ひし風のつらかりけりと思ひしるべきとなり、さしわたりたることの面白さに心をとられては、身の咎とも家の衰へともなりなんを思ひはからず、或は色に耽けり、或は奢に長じ、或は技藝に淫し、諸勝負に心をうばゝるゝ人、皆後悔すべし、此歌の如く、をかしと思ふ時に後をはからで、あやまちなからんかし、

（つゞく）

こほろぎものがたり

師岡須賀子

このものがたりは、むかし、やむ事なき君の、たはぶれに作り給ひしにて、母が、ある御館に仕へまつりし折、乞ひてうつしおけるなりとて、示されつ、見るまゝに、暮行く秋をかこつらん虫の聲聲も、さすがきゝすてがたく。はた、學のまどに勤み給ふ嬢達のなぐさみにもなりなん、きはなん露のひかりならましと、送りまゐらす。さるは、いかゞと思ふふし〴〵もなきにあらねど、中々に、さかしら加へんよりはと、本のまゝなん。

あやしのいほの草枕、しば〳〵こゝに假寝して、憂き世の中を、つく〴〵と思ひつゞけて、日を送りける。頃しも秋の末つ方、庭の冷しきもとあらみ、木々の梢も色つきて、風に亂れ、そこはかと

なく物淋しき月影に、心をすます折ふし、片はらなる萩の下葉のかげよりも、虫のかずかず集りて、すゞろなる物語するをきけば、其中よりこほろぎといふ虫の出でゝ申しけるは、いかにかたがた聞たまへ、誠に我々が身の上ほど、淺ましき事はよもあらじ、春過ぬれば夏の緑も深く茂り合ひて、五月水無月の頃は、朝な夕なに置露の、玉を亂せる如くにて、心もうき立ち、又は千艸の花の香にそみ、あるは心地よき水の流に、我身の影を移して、此所彼所と飛遊ぶときは、罪もむくいも忘れはてゝ、心も空に浮れつゝ、世のうき事も思はず。夜も長月になりぬれば、手足さへも、心のまゝならず、まして聲もかれはてゝ、頼む草葉に露もやどらず、いつしか初霜に結びかへて、ねぐらもあらはになりゆけば、木々の小枝に、小鳥の聲を聞く時は、消ゆる思に、心をいたまし、あるは人ちかき垣根に取りつき、又は縁の下に身をかくさんとすれば、こざかしき貓にさがし出されて、うきめをみむことを口をしく、かなたこなた迷ひ出けるを、いたづらなる子供たちにとらへられ、歎さかな、糸につながれて、大地を引まはされ、恥をさらし、あまつさへ、竹のとぐひにさしとほされ、忽氣を失ひ、すでに空しくならんとすれば、又水を呑ませ、いたはる樣に、もてなし、やうやう心をとり直すと思へば、かなしやふみ殺され、遂には、川に流され、うき目を見むより、火の中へも入らばやと思ふも、身をいましめられていふかひもなし、涙に身をぞぬれ衣、うらめしき世の報の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はせこそ、かなしけれ。歎きても猶あまりあり。明日は命も志ら露の、とてもきえなん命ぞかし。さめて今宵の月影に、おの〳〵や我々が、心に思ふことのはを、かたり慰めんこそ嬉しけれ。いざ敷島の道にことよせて、拙き言の葉に、三十一文字に結びおき、長きあとまでのかたみともなし給へかし。とこま〳〵とかたれバ、あまたの虫ども、はた寒き衣の袖を顔におしあてゝ、涙をながし、さて〳〵日頃おもひけるは、こほろぎ殿は、色も黒く、せもかゞみ、生れつきやさしからず、花のもと、月の影にも、心をかけ給はず、たゞの壁にとりつき、又は流のもとに身をかこち、哀も辨へず、夕暮より夜半の頃まで、なき給ふに、聲のみよそ〳〵しく、きこえしに、今宵の御物がたりこそ、いづれも哀を催しさぶらふ。御志のほど有がたからん。ひきかへる出で、申けるやうは、こよひは月もさえ渡り、面白く候なり。志からば、夜のあけぬ間、三十一文字にはやとくとくと、ありければ、おの〳〵落葉の志とねに座をならべて、思ひ〳〵に詠じける、心の内こそをかしけれ。

こほろぎの歌

こゝの隅かしこの壁にすがりつき
身はかずならで君をこほろぎ

はたおり虫

片糸をより〳〵野べにとりかへし
はたおりかけてなきあかす哉

鈴虫

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

きみにかくふりすてられし鈴虫の
　我身のはてはいかゞなるべき

かげらふ

わはれなり夕はかなきかげらふの
　消ゆるいのちは露のひとゝき

玉むし

いろふかき千艸の花のかず〴〵よ
　思ひみだるゝつゆのたまむし

簑虫

戀わびてなみだの雨にぬれにけり
　わが簑むしはきてもかひなし

はち

さをさしていつか渡らんみつ瀬川
　はちすの船にのりをもとめて

木こり虫

人しれぬみやまの奥にすみなれて
　あさなゆふなにつま木こり虫

（つゞく）

女畫師

其二

乙羽庵主人

春の日の麗かさ。窓には和かなる日影の、花の梢を映して淡く、落英もちら〳〵と

二三輪の溢れて、地に紋形を畫けば、小柴垣をめぐれる小川の、清き水を湛へ、岸の青草、水車の飛沫の散りて、轉々玉を綴る田家の風光、何處やらに瀟洒として趣あり。

別けて御室は花に名高く、騷人墨客常に跡をうつして、春を郊外に趁ふ者多きも、境幽にして物俗ならず、鳥の囀り、山の形の美くしき、畫にかけぬとは此邊なるべし。池旭は三條の寓居より此處に引移りぬ。移りてよりは娑婆三界の五月蠅き事も耳に入れず、一心專念に丹靑の技に精出して、女ながらも天晴美事なる繪を出來し、有功卿に賞められ、それよりして滿都の人に名を謳はれんものと、其道に精しきだけ、其技に勤めけり。

頃は嘉永の末にして、打續く太平に洛中洛外は、たゞ綺羅に裹まれたる花の雲、西山北山の春色は紅張の晴傘を呼んで、野道に黄なる蝶のゆら／＼と飛ぶも長閑なり。その六年には亞米利加の黑船相州浦賀に着きて、互市貿易を請ふ事頻りなりければ、江戸にては諸大名の警固嚴かにして、今にも合戰の始らんかの如く、將軍膝下の近海には番船を泛べて、長風に旌旗を飜し、晝夜防禦に備ふる程なれば、貴賤

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

上下は仔細を辨へず、すは異國と戰爭始りぬ、命ありての物種なりなど唱へて、恐れ怖き寢食を安んぜず、老人子供を在方に遁し遣りて、立騒ぐもありけり。もとより百姓亂を忘れし折の出來事、青天の霹靂に齊しければ、天下の驚き一方ならぬ中に、京都のみは悠々として大佛の鼻に蚤の止りし程にも思はず、江戸に斯ういふ事があつたと、茶店の老婆が噂話に愛嬌の花を添へる位のことゆゑ、花見る人も去年に變らず、嵐山も昨日今日は見頃と、この安政元年の春までは、月も一入の風情を増して、一刻千兩とは高く無い價値、江戸には日千兩といふものもありけりと、他人の國をくさしたがる京の口も可笑し。

御室に移りたる池旭が家は、茅葺屋根の一軒屋、嵐山を見とほしにして、松の色の面白きを、繪の粉本の中に入れ、野に立つ霞を垣根代りに、いと風流なる構造なり。畫室には例の注連繩を張りて、男嫌ひの標を見せ、床には白鞘の一刀を飾りて、慮外者のあらん時の用意となしぬ。炊ぎの業には一人の老婆を雇ひて、臺所一切の用事を任せ、其身はたゞ明けても暮ても繪の事ばかりに心を傾け、今日もまた繪筆を提げて、嵯峨に小督が昔時を訪ひ、歸路に就けた日は落ちて、野面の黒う見ゆる頃

となりぬ。

折から野を辿り來る二人の泥醉武士あり。世には一片の瓣をだに惜む人のあるに、醉興にも事にこそよれ、名々に一枝を折りて、紐もて結びつけぬ。酒も程好く飲みてこそ、樂みも深からむに、前後をも忘るゝまで醉うて、足腰も定かならず、一歩躓いて踉々蹌々、此方へよろげ來て池旭の胸に突き當りたり。尋常の女子ならば、轉び倒れもせんずものを、此方はかねて期したる事とて、早速に直と身を捻ねれハ、武士は反を打て路傍の草中に轉げたり。一人の武士はこの體を見て怫と腹立て。此奴同僚を投げをつたなと、刀の鯉口寛げて池旭の傍に詰め寄りながら、見れど如何、花よりもなほ美くしき美人なり。

武士は朦朧たる醉眼を瞻開きて、おう其方は女子か、その女子の其方が、何故同僚をこの草中へ投げた、顏が美しうても、返辭次第で堪忍ならぬと詰め寄るを、池旭は揉手して、一禮し。はい〳〵何で妾がお投げ申しませう、旦那樣こそ却て妾に突き當りなさりましたれ、大抵にして御堪辨遊ばしませと云ひつゝ、後邊をも見ずして駈け出しぬ。武士は遣らぬと追ッかけたれど、醉うての足元定め無く、頓て池旭

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を見失ひぬ。
池旭は急ぎ我家に歸り、竹椽に腰うちかけて、漸うに黑み行く野面をうち眺め居る折から、狩衣に奴袴召したる殿上人の、柴の門の方より進み來給ひぬ。それと見るよりも慇懃に會釋すれど、殿上人は池旭壯健かとも宣はせぬ。
池旭は恐る〳〵床の間に立てかけある嵐山の繪を取出し、殿上人の御前に据うれど、首傾けてヂッと見詰め給ひ。おう好き出來と仰せられたり。重ねて花鳥の圖を出して、未だ振も無き嫋竹の、惡しき節々もありますれど、お指圖を願ひまするど、羞らひながら平伏すを、殿上人は中啓もて圖をさし示し給ひ池旭この落花が無かりしなら、却て趣ありはせぬかと問はせらる。池旭は何とか思ひけむ、墨摺り流して、さら〳〵と散らし書きの短冊を扇に載せて、御手下にさし出しけるを、取上げて見給へど、「摘ためて目には餘れど百卿の花の一ひら捨ぞかねぬる」とあり。こは面白し、其方は和歌にも堪能ぢやなど、千種の卿は思はず微笑し給ひけり。

文林

名所菊

華頂宮御息所郁子御方

影うつるみぎはの菊をひろさはの
いけの底にもさくかとぞ見る

近衛　忠熙

しらぎくの花かなみかの言の葉も
匂ひをのこすふきわけのはま

東久世通禧

おほゐ川まつのしづくや掛るらん
千代のいろそふしらぎくの花

鍋島　直大

露しものそめ井の里をわきとへど
たゞしらぎくの花ぞにほへる

前田　利嗣

大井川きしのしらぎくさきみちて
かげゆく水も香ににほひけり

高崎　正風

いにしへの御幸のあとをおほゐ川
千代までのこす白ぎくのはな

前田　利鬯

ひろさはの池のみぎはに寄る浪も
馨るばかりにさけるきくかな

田家

諏訪　忠元

垣もなきたみのいほりは苅とりて
むすぶ稲葉をまがきとも見ん

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

名所菊　植松　有經

うごきなき岩くら山にさくきくは
折てののちもよろづ代のもの　谷　勤

裏枯しむらさきのゆきまめのゆき
きくのさかりにあひにける哉　岡部　讓

秋燈

呉竹のおくのともし火かげやせて
あきの夜長のあはれ見せけり　三浦　千春

秋のころ物へ行く道にて

野菊さくちふの霧はらふみわけて
あさゆく道になくきり〴〵す

湯淺瑠璃子　佐々　豊水

夫につくす道のまさみち踏ねてぞ
こゝろの光りあらはれにける　草野　隆道

虫聲悲

秋の夜のひとつおもひをまら露の
みだれて千々に虫のなくらん　千日　亮

故郷菊

すみすてゝとしふるさとの菊の花
植けんひとの千代の香ぞする　鍋島　榮子

名所菊

年々にめなれぬいろのみゆるかな
そめ井の里のきくのはなその　前田　朗子

移ろひし秋のさがのにきて見れど
またあたらしく菊さきにけり　伊東ちせ子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大澤のいけにうつろふしらぎくに
むかしのかげもにほひけるかな
松平　健子

かにゝはふ菊のさかりはおほ澤の
池のそこにもさくかとぞ見る
伊藤　生子

秋霧のたえまに見ればむらさきの
のべのしら菊うつろひにけり
田邊　若子

みちとほき谷中の里もきくさきて
見にゆく人のたえぬころかな
田邊たつ子

うれしくも谷中の里をとひしかな
今日より菊をみすといふひに

時雨にも霜にもかれずにほふらん
たみのゝ島のしらぎくのはな
中澤のぶ子

さま〴〵に染井のきくの花そのも
白きにまさるいろなかりけり
中島　歌子

旅宿擣衣　三輪田眞佐子

擣つや誰きぬたの音のとほ〴〵に
みやこをしのぶ旅路にぞきく

秋田　諏訪　晴子

秋かぜに門田のなる子うごくらん
たつむら鳥の羽おとさむけき

王仁　小川　昌子

うめのはな手折いでけむ言の葉の

上にかゞやくあまつ川のかげ

水門霧　師岡須賀子

水なせ川やまもとかすむ春よりも
あはれはふかきあきの夕ぎり

名所月　柳　靖子

吉野やま月きよけれどいにしへを
老のぶなみだにかつ曇りつゝ

月のあかき夜笛をきゝてよめる

海上壽子

すみわたる秋の月夜を　ねもやらず愛に愛つゝ
ふくる迄端居しをれば　まくらつく妻まつ人か
寝覺せし老のすさびか　窓にふく風のまにまに
笛の音きこゆ

松の雫　千稻子

其一（藤島）

遠くむらがる山の端に　入日の影も消えゆきて
深くこめたる夕ぎりに　羽搔も老める雁がねの
列を離れてふたつみつ　鳴行く聲ぞ身には染む
見わたすかぎり冬野原　松のこずゑの風さわぎ
秋のかれ葉に霜散りて　尾花は獨招くなり
命は葉よりなき者と　きみにつくさん眞心を
ふるひおこして丈夫が　電光散らしをたけびて
斬りつ斬られつ戰ひし　軍のあとは此處なるか
ゆみ矢は折れて屍とび　此處に彼處に亂れちる
血汐の名殘は消やらで　かれ葉を染めて腥し
魂はいづこに迷ふらむ　何處の空をかけるらむ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あはれ思ふも涙なり」
俄に降り來る村さめに
つきの光もかくろひて
梢にむせぶこがらしの
聲きくさへも膚さむし
折しも一人の婦女あり
をさなきみどり子懷に
雨にあてじと兩そでを
しかと擁ひて搖りつゝ
靡くかれくさふみ開き
道なき道をたどり來て
しばしは此處に佇みぬ
髮はおどろに亂るれど
かぐろき匂は失もせず
衣はしゝどに濡たれど
憂におもは瘦せたれど
清き色香は消えやらで
けだかき樣は最床し」
あたり見まはしやゝ暫
涙にくれてありけるが
頸をあげてやうやくに
あはれ我夫きこしめせ
此のごろ此の地の戰に
打死ありしと聞きし折
隱りましぬと聞きし時
其の悲さは如何なりし
涙にそでもくちはてゝ
爲すべき術も知ざりき

やがて心を取りなほし
御跡を問はん其の爲に
漸こゝまでたどり來ぬ
御魂の此世に座まさで
あはれと思せ我が夫よ
眞心とげずはかなくも
消え行き給ひし胸の中
如何に無念と思しけん
口惜しとこそ思しけめ
神もまさぬか此世には
曰はんとしては咽返り
衣のそでを食ひしめつ
又も堰き來るなみだ川
こらへかねてや枯草に
身を放出りて立も兼ね
いくたび絞る袖のつゆ
雲間を出でしつき影の
光はさやかに照らせ共
心のやみは晴れやらず
空を仰ぎてなげかへど
梢にさわぐかせならで
答へん者はあらざりき

（つゞく）

中秋朧月

勝家貞良

秋もいつしかなかばすぎて、月に名だゝる夜とはなりぬ。近からむには、須磨、明石の浦つたひもすべけれど、遥けき海山を隔てたれど、甲斐なし。せめては、更級までもと、かねてより思ひわたりしを、朝の空、いたく霧ふたがりて、雨さへそぼふりけれど、今宵の月は、頼みなしと思ひ絶えてありしが、宵近うなるまゝに、雲のたえ間の見えそめたるいとうれし、されどとて、今よりはまた何れへと心もえ進まねど、こゝながらながめむものと、花瓶に尾花さしいれ、文机のあたり、とりかたづけなどして、手むくる程に、東の山ぎは、すこしあかりたれど、今にも月のさしいづるならむと打守りたる折しもあれ、おぼつかなくも、雲霧の山の甲斐よりたなびきそめたる、とばかり見やれども、なほ晴るべくもあらねば、待ちまうけたる月にはあらで、木の間よりちら／＼見ゆるは、たゞ麓の賤がやのともし火の影のみ、常はさやけき月かげにけおされ、あるかなきかにて心にもとまらざりしを、今宵のみ目の前にきらめきたる、こよなう哀なり。かくて夜もふけゆくまゝに、いささか空もあかりて、雲霧も薄くなりやしぬらむ、月影はのかに匂ひいでたる、さながら春の夜の霞まぬ浪も霞むけはひの、うつるも曇るもおぼろげながら、いとなつかしうて、今まばしとながむる程に、あな心なしや、又も村雲のかゝりきて、いよいよ晴るべくも見えねど、今は心さへいとゞしくかき曇りてなむ。

てりわたる月の光をわがまつと

しらずやあるらむ白雲のたつ
あはれ、秋のも中のかげよ、月に村雲のたとへはあれど、よべまでくまなく晴れ渡りたる大空の一夜の隙にかうにはかに立ちかはらむとは思ひかけざりしを、いとも〳〵口惜しうてなむ。

暑中休の間にありしことどもを

女子高等師範學校第三年生　龍　さと子

人の世渡る道のやすからぬことは、けはしき山路をたどり、また、大海に、小舟浮かべたらんにもまさるべし。されば、世渡らんとする身は、いかなるかなしみも、いかなる苦も、なにかは恐れ、なにかは厭ふべき。たゞ、世のため君のために盡くさんとする心もなく、父母の御心をうれへしめ奉り、人の道を行得ざらんこそ、ゆゝしき事のかぎりならめ。さるを、わが身は健ならで、もの〻用にもたゝず、學業さへ、こゝろにまかせず、今年は、さだまれる日にも先だちて、古郷にかへりつれど、日頃、師の君の、しめし給へることを行はんとするも、こゝろにまかせず、なき父君の後を弔ひて、ひとり、わびしうおはする母君の御心をだに、えなぐさめ奉らざる事の、かなしう、心くるしくて、年の内に、たのしとも、またなくたのしき夏の休も、なか〳〵に、物うかりけり。さりとて、今は、せんかたなければ、たゞ、誠のこゝろもて、母君につかへ奉り、一日もはやく、健なる身となりて、御心をやすめ奉らんにはしかじと、醫師に、療治こひければ、海水浴なん、

よきとの給ふに、いざとて、七月廿日あまり二日のひ、母君とともに、舞坂なる浴場に赴きぬ。ここは、名にしおふ遠つあふみの、濱名の湖の邊にて、いまぎれなる辨天島といふちさき島なん、やがて、浴場のあるところにはありける。くろかねをもとかすばかりの、此頃の暑さをさけんとにや、こゝかしこより、人々の集ひ來て、ところせきまで、にぎはゝし。あるは、潮を浴み、あるは、舟遊びし、又は、糸竹、圍碁將棊など玩びつゝ、よのことも、打忘れたるさま也。われも、こゝにやどりたれど、磯べなるちいさきはなれや一つかりたれバ、いと、ものしづかなり。遠く、海面を見渡せど、清き風そよめきて、波靜に、濱べに茂れる小松原のこかげより、釣舟などの、あまた行きかふさま見えて、あかずをかし。はた、みなぎはわかりて、日かげのさしいづるあした、月かげ、波にくだけて流るゝ夕のけしきなど、畫にもかゝまほしきこゝちしけり。水にもなれぬ女子の身もて、しほ湖に浴するなど、よそめはづかしき事なれど、くすりと聞けば、いなみもせで、はしためとともに、朝夕あむほどに、しるしみえて、日に心よくなり行く。雨の降る日、徒然なぐさめんとて、物の文などとうでつるに、母君の、かねて、知り給へる人なりとか。となりべやに、から文にたけたる翁いまして、禮記といふ文の内を、ねむごろに、ときゝかせ給ひしなん、いとうれしかりける。天氣よき日は、あたりを、そゞろありきし給へと、醫師のすゝめ給へれど、近きあたりよは、

古跡などもなけれど、母君とともに、貝など拾ひて、海邊をたどるほど、海人の子のあそべるが、年頃の、十ばかりなれど、水練に巧なること、大人も及ばぬほどにて、高き處より、水底にいりては浮かび、うかびては、またしづみつゝ、よねんもなかりしが、我方を、つと見て、何見給ふといふさま、あはれにらう〳〵じかりければ、菓子とらせんとて、宿にゐて行きて、さま〳〵の事など、問ひて試むるに、あはれや、西も東もくらやみにて、世は、たゞ、おのがすめる海邊のみと思ひて、いわしとる小舟あること知れど、鯨とる大船あることを知らず。何故に、學校へは行かぬぞと問へば、文よみて、村長樣とならんより、魚とりて、金まうけよと、父母ののたまへればといふ。あゝ、これ、誠に、教導く人の罪ぞかし。海人の子を教へんに、海人の子を教へんてだてもて導きなば、かゝる誤もあらで、教育のみちもすゝみ、海産の業も、いよゝすゝむべきものをと、かなしう、やるかたなかりき。旅のならひにて、人皆、徒然なる程なれど、あひしれる人は、更にもいはず、しらぬも、なれ〳〵しう、四方山のことなど、かたらふもをかし。また、休日には、近きわたりの友だち、あまた、問ひ來ぬれど、くさ〳〵の物語に、人の交より、世のさま、教育の事どもまで、いささか、見知り、きゝしりて、行末の事ども思へど、且はたのしく、且はかなしくて、とにもかくにも、身をつゝしみ、よく、事をつとめんにはしかずと思定めぬ。とかうするほど、長き此頃の日も、い

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雜報

つしか、八月半とはなりにけり。今は、身も健になりぬるに、姉上より、さびしきに、はや歸りねとの消息得て、十日あまり八日の夕さり、濱松なる我家にかへりぬ。かくときゝて、知れる人などの、日々、たづね、來れば、日もみじかく覺えつゝ、過ぐるほどに、兄上の、都近く上り給ふべしとわるに、よき折なれば、伴はれて、休は、まだをはらねど、八月卅日といふ日、家をいでゝ、都にのぼりぬ。例は、なごりをしう、かなしきを、今年は、我身、健になりて、母上の御けしき、いとよく、御心にかゝるふしもおはしまさぬ御有樣なれど、歸り來しときのかなしみに引きかへて、自うれしう、こゝろよく出立ちぬ。あはれ、世に、かなしき事は多かれど、父母の御心を、えやすめ奉らざるにまさるかなしみなく、世に、たのしき事は多かれど、父母の御心を、やすめ奉るにまさるたのしみぞなき。されど、今よりは、母君の、われを思ほす御心を仰ぎ奉り、身を健に、心をさめて、すぎにしかたの不孝の罪を、あがなはずてやはあるべき。

●天長節　をとつ日は、待ちに待ち奉れりし「大君のうまれたまひし吉き日なり。」億兆、同じ心に祝ぎ奉らん心がまへの程、大方ならざりしに都の天は、よべより、小雨そぼふり、いと心に掛かりしも、さすがに、わが天皇の、かしこき御稜威の光に、空ゆく雲は、わとなく晴れ渡り、千門萬戸、日の大御旗ひるがへり、祝賀の聲、八百八街に滿ちたり。あはれ愛でたきかも。あはれ尊きかも。

君は千代ませ。八千代ませ。さゞれいしの、巖となりて、苔のむすまで。苔のむすまで。

●秋老い　夜長く、四面物しづかなる頃となりぬ。燈をかゝげて、書讀まむにも、仕事せむにも、ことに便よし。孃達、ゆめ、この好季節を、あだに過ぐしたまはで、心をひそめ、思をこらし、世の賢母良妻となる道をもとめたまへ。あなかしこ。

●菊　いづこも、盛なり。孃達の庭前にも、定めて、さき匂へるならん。こも亦、あだに見過ぐしたまはで、歌情をねり、詩思をみがく材料とえたまひ、淸き香を、時に放ちたまへ。

●女子敎育に關する私見(つゞき)

中川謙次郎

余輩敎育者は女子初等敎育に於ては其就學比を增して男女殆ど等しからしむることに其中等敎育に於ては之を普及上進せしむることに力を致さゞるべからず又女子のため漸次高等敎育の門を開くことにも思を致さゞるべからず此くの如きは敎育者たるものゝ務なるのみならず亦當に男子たる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

もの丶務と云ふべきなり
下には女子初等敎育中等敎育及高等敎育に就き更に卑見を陳じて諸君の敎を乞はん

［一］女子初等敎育に就きて　尋常小學校に於ては男女兒共學を利ありと認むれども高等小學校に於ては成るべく男女兒學校を分ち若くは敎室を分つことは男女子のために利あるも害なくして大に父兄を安心せしめ女兒の就學比を增すの効あるべし市は勿論其他人口多き土地には必女兒小學校の設立を見るに至らんことを切に希望する所なり全國中女兒小學校と稱すべきものは其の數公立に百七十七私立に廿八あるのみ

小學校　敎科は其の尋常なると高等なるとに係らず制度の許す限り成るべく簡易にして修身讀書算術と手仕事殊に裁縫を課するに止め以て實際に適切なる敎育を施さんことを希望す元來小學校の敎育は家庭敎育と相待て善良有爲なる國民の基礎を固むるにあれば修身の科は勿論諸敎科に於て主として忠君愛國の念を懐かしむることを勉めざるべからず我帝國々民たるものを養成するに於て忠君愛國の念を懐かしむることの肝要なるは男女を問ふべきにあらずと雖彼の女子は家庭の敎師たり未來の國民の母たるにより時に女子に於て此精神を養ふことの重要事たることに深く意を留め思を凝らさゞるべからず又尋常小學校高等小學校ともに女兒の爲に特に補習科を置き主として裁縫等の手仕事と讀書を授け且成るべく半日學校の制を試むるに至らんことを望む尤土地の情况により補

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

習すべき學科は種々なるべしと雖成るべく實際に適切なる仕組となし以て高等女學校と區別すること肝要なるべし又一般普通教育に於ては學校と家庭と氣脈を通じ常に同心一体となりて兒童を教育することの大切なるは勿論なりと雖女子初等教育に於ては特に此點に注意することの深きを要するなり而して現今此關係如何を觀察すれば慨嘆に堪へざるものなきにあらず其の甚しきに至りては學校と家庭と教育の方法を異にし女兒をして適從する所を失はしむるが如きことなきにあらざるべし女兒の不幸如何ばかりぞ

更に細事に涉りて一言せん女兒小學校若くは男女教室を異にする學校に於ては女教員をして女兒教育の局にあたらしめ且教員の受持を時々變更することなく教員と女兒と共に級を進むの仕組となし以て教員は第二の母たり學校は第二の家たるの實をあぐるにあらざれば眞の教育を施すことは蓋難かるべきなり

(二)女子中等教育 即 高等女學校及女子技藝學校の教育に就きて　高等女學校の數は前に云ふ如く五十餘ありと雖多くは私立に係りて二三の土地に遍在するものなるにより各府縣に於ては其公費を以て少くも高等女學校一校を設くること至當にして急務なりと信ずるなり然れども私立高等女學校の設立に反對するものにあらず寧我國に適當なる私立高等女學校の益増設せられんことを希望するものなり但我國の女子に適當なる教育を施す所の學校をこそ望むなれ其官立私立など固よ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

り問ふ所にあらざるなり然るに現今私立高等女學校中基督教家の設立に係るものあり又直接間接に基督教家に關係あるものありて其の數少からず即ち基督教主義女學校は高等女學校の大多數を占むるのなり我中等教育は基督教勢力の下にあるものと云ふも敢て失當の言にあらざるべし此等基督教主義女學校は其校數の多きのみならず各校生徒の數も亦少からずと云ふ故に此等女學校教育の主義方針より教育管理の細事に涉りて審察し其利害を講究するは余輩教育者の當に務むべき所にして未其緒に就かざるは最遺憾とする所なり故に此等女學校に就き彼是論評を試むるは憚るべき所なりと雖も敢て數言を發して所思を述べん

基督教主義女學校は熱心を以て其多數なる生徒を教へ懇切を以て之を導き我女子教育のために盡くす所甚だ大なるに係はらず此等女學校は一般に不人望の傾向あるものにあらずやとの疑あり若大躰に於て此等女學校の教育は我國の内助たるべき女子を養成する上に缺ぐる所あるに由るにあらずや目的と方法とを混同するが如きことあるに由るにあらずや教育の局に當る人にして我帝國君民の關係の世界に無比なることを始として儀式習慣をも辨へず畏くも我
天皇陛下の下し賜へる教育に關する
勅語に據りて教育することを爲さず甚しきに至りては我帝國憲法に保證する信教の自由を妨ぐるが如き行爲あり信教の自由は人の最尊重する所にして世界廣しと雖も實際我帝國臣民の如く信教の自

出を有するもの幾何かある然るに若學校にして其生徒を勸誘して其宗敎を信ぜしめんとすることあらんか此尊き自由を害する所なきを得んや要するに此等女學校は我國情を詳にせず我國現今の女子に不適當なる敎育を施すに由りて世の信用薄きにあらずやと疑ふ

凡我帝國の學校敎育に於ては其大小男女を論せず敎育に關する　勅語に基きて主として忠孝の敎を布き以て諸宗敎と衝突せざることを勉むべしと雖宗敎に基きて學校敎育を施すは我國情の許さゞる所なりと堅く信じて疑はず約言すれば學校敎育は宗敎に關係なくして能く宗敎を容るべき洪量なる

勅語に基きて之を施すことと全國一轍に出づることを希望す

これより一般高等女學校の學科授業時數等につきて一言せん高等女學校の學科は之を適當に配合して好く相調和せしむるには敎育に關する

勅語に基ける脩身科を緯線とし他の諸科を經線とし其經とすべき學科中國語本邦歷史及家事を主科とし其他を副科とし躰操は之を重んじ相當の種類を課することを怠るべからず又漢文と外國語は土地の情況によりて加除する所なるが此二科は敎育上殆ど其價値相等しきものにして今日に在りては漢文は國語の上に補すべく外國語は思想の練習に補することを期すべし故に會話を目的として外國語を課するか如きは取らざる所なり尙注意すべき一事は學科に係る生徒の負擔は成るべく之を輕く

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して好く調和同化せしむること是なり日々の課業は生徒の腦力に相當せるや過食して食物の消化せざるが如きことあらずや

高等女學校の毎週授業時數は五時若くは六時と定むる所多數なるが如し余は五時を適度と考ふれども四時にても決して過少にあらずと考ふ土地の情況により半日學校の制を高等女學校に試むること頗有益なるべしと信ず何となれば高等女學校生徒をして成るべく家事の實際を練習せしむることは我邦に於て特に肝要なるを以てなり

小學校補習科を設くることの甚有益なると同じく高等小學校にも專修科を設くること甚有益なるべし而して專修科には學問を主とすると技藝を主とするとの二種の成立を望む其甲種に於ては小數の學科を其乙種に於ては小數の技藝を稍深く修むるの便路を開き以て女子教育の上進に資すべきなり

細事に渉れども教員の受持方に就きて一言せん教員は學科の受持を主として生徒の教育を擔任すると云ふことは餘所事になり行くにあらずや教員を學科に配當すること必しも惡しきにあらず否時としては必要なれども內助たるべき女子を養成せんとの目的より見れば小學校と同じく教員を生徒に配當して各其一級を擔當せしめ一二の學科のみ補助教員をして補助せしめ終始教員生徒相離れざるの仕組となす方適當なるべしと信ずるなり

今又寄宿舍のことに付きても一言せん元來寄宿

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

學校は余の反對する所にして女子は成るべく其家庭より通學して常に家事を練習すべく若其便を缺ぐ場合に於ては相當なる良家に寄宿通學して其家風を習ひ家事を練習すべしと勸誘するものなり然れども寄宿舍に入りて修業するの止むべからざる事情あることあらん此くの如き場合には寄宿舍に入るも不可なしと雖該舍は其仕組を成るべく家庭に近づけ生徒は舍監を第二の母と仰ぎ年長生徒を姉として仕へ年少生徒を妹として慈しむの舍風を固め以て迂濶の女子を養成せざらんことに深く注意すべきなり其厨房のことの如きは生徒をして自當らしめ以て他日主婦たるべきの教育を補ふべきなり若女子の寄宿學校永く存續すべきものとすれど寄宿舍の教育大に講究を要すべきものあり何となれバ我邦の家制は其組織甚複雜にして學校の生活に慣れたる者一轉して直に好く之を理むることは頗難しとする所なれバなり

高等女學校のことは此に止め轉じて女子技藝學校に移らん此種の學校は其數全國に百余あり而して三府其他に偏在す之に屬する學校には學校と稱して其實を備へざるもの甚多きが如したとへバ裁縫學校など云ひて其術のみを授け教育と云ふことの甚少きものあり是れ一方には學科多端なる高等女學校と相照應すべきものにして教育者の一考を値すべきことなり余は希望す高等女學校も其專修科と同じく學問を主とすると技藝を主とするとの二種に分れ以て教育し漸技藝練習所の如き學校の廢滅に歸せんことを

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子技藝學校中女子に職業を授けんとの目的に出づるもの少からず此事に就ては固より異論なしと雖女子に職業を授け以て女子の獨立を計るが如き若くは其教育を受けて男子に依らず自獨立せんとするが如き甚しき謬迷のため不幸に陷るものあるを防がざるべからず歐米諸國男女人口の比例を聞くに女の男に超過するを通常とす故に女子にして男子に依らず獨立自營を必要とするもの必ずあるべきにより教育を受けて以て自營の道を開くことありと聞けども我邦にては之に反し男女の人口を比するに男の女に超過すること四十万余なり故に我邦にては女子獨立の必要なく却て女子の獨立を計るものあれバ男女の不幸を導くものと云はざるべからず是を以て女子の職業教育は夫婦共稼のため若くは不幸に際し家を支ふるために施す所なることを明にすべきなり

（三）女子高等教育に就きて　現今我邦には女子の高等教育なし中等教育も其度を高むるにあらざれバ高等教育に連絡すること素より難し故に高等女學校に於ける專修科を發達せしめて女子高等教育の楷梯となすこと如何なるべき女子高等教育は男子高等教育と併進すべきものにあらず我邦一般の女子は高等女學校教育を受くれバ以て足れりとなすべしと雖男女其天職を異にすと雖女子たるの故を以て高等なる教育を受くることを得ずと云ふは穩當ならざるにより有數女子の爲に專修科を以て大學に入るの豫備となし以て女子にても事情の許すものは高等教育を受くるに至らんことを希望す

（をはり）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

餘芳

みちのつと（つゞき）

小池道子

二日、雨。小倉權典侍、樹下掌侍を始め、先、出立ち給ふ。
三日、晝の程は、暇給はりて、旅の用意に暮らしぬ。夕つ方、參りたるに、御まうけども、整はせ給へり。人々より、餞の歌、奉りたれど、見よと仰せ言あり。御歌の師なる高崎宮中顧問官、

三芳野の千本の櫻殘りなく咲み綻びて君を待つらむ。」

古の雲井の櫻みそなはす御衣の袖に露や散るらむ。」

此の春の夢の胡蝶はいでましの花見驗の跡や慕ふらむ」。愛でたうも讀まれたる物かなと、又、打返し、御覽ず。稅所權掌侍より、

見まさずは匂はむかひも有らじとや御苑の花のまだき散るらむ」と、聞こえさせ給へれば、とみに、御硯召して、

散る花のこずゑはおきて春寒き風をぞ厭ふ老人の爲」と給はりぬ。おはし坐さ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ぬ程のさう〳〵しさも、かゝる忝き仰せ言に慰み侍らむなど、かしこまり給へるさま、理なり。同じ君より、我には、

遠ざかる程ぞ悲しき思ふ友御供に立つは嬉しけれども」と有りけるに、

憂きことを知らぬ旅路に悲しきは君を殘して出づるなりけり。

四日、空うらゝかに晴れ渡りて、心ちよし。曉に起き出て、旅の裝、取り繕ひて參る。御氣色麗しう、殘り給へる人々に、仰せ言ども有りて、七時に、御車寄より出でさせ給ふ。嬉しき旅なれど、顧みがちなるに、御苑の花の陰、松の木の間などに、赤き物の、むら〳〵見ゆるは、何ならむと思へば、若き子たちの、しのびて見送り奉れる袿、袴などなりけり。正門の内には、華族女學校の生徒、立並びて送り奉る。整列したる兵隊、幾ばくならむ。次々に送りたいまつれる人、數知らず。車の内に在りても、まばゆき心ちす。殘り給へる人々の上など、いひ續くる折、昨日、師の君より、別れの歌おこせ給ひしを、返しも聞こえさせずと、愛子の君の語り給へるに、ねたうなりて、

聽くかひもあらじと思ひて鶯の吾には聲を惜しむなるらむ。」石筆もて書かむと

すれど、車のとよみにて書かれず。新橋にてかいつけて、歸り給へる人に言傳てゝ、聞こえさせむと思ひけるに、人々打興じて、今そこに見え給ひしを、呼びて參らせよとて、呼び入れ給へり。をこなることといひてけりな。いかにせむと思へど、言はで止むべきにも有らねど、參らせたるに、打ちゑみながら、やがて、名刺の裏に書きて給へり。

鶯も鳴かずなりけむ言の葉の花の匂におくれて」。常よ誠め給へるにかはりて、花の匂などのたまへるはど、をかし。御車整ひぬと聞こえさするに、出立たせ給ふ。大宮より、萬里小路典侍、御使に參り給へり。御言傳ども、ゑめやかなる御有樣なり。東宮は、御傍に立たせ給へり。常にかはらせ給ひて、打ちゑめらせ給へるに、御手を取らせ給ひて、學の道に、な怠らせ給ひそ。かく、おとなしうおはし坐すを奏し侍らむなど、のたまはすれば、うなつかせ給へる、いと愛でたし。姫宮にも、御顏を撫でさせ給ひて、物のたまはするを、打守り奉り給へるは、常にかはりたりど、おぼすなるべし。おびたゞしう集ひたる人にも、慴ぢさせ給はで、宮のおはし坐す方のみ、見遣り奉り給へる、らうたき御有樣なり。御息所たちを始め、大臣、北方

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たち、内よりは、千種權典侍、姉小路掌侍、送り仕う奉り給へり」。動き初めたりと思ふ間も無く、遠ざかりぬ。品川沖、うち和ぎて、舟の帆影、數知らず。又こなたを見れど、白う打晴れたる富士の嶺、始めて見る物よりも珍しう、其方にのみ向ひがちなり。大磯近う成りぬ。教子君の、此のわたりに、人の案内しつれど、十時頃の滊車にて行かむと、語り給ひし事を思ひ出づ。

君待ちて行かまし物をこゆるぎのいろ〳〵旅こそすべ無かりけれ」。長き御道筋に、停車場は、いふも更なり。其の間にも、某の學校と書いたる旗、押立て丶迎へ奉れるを、御覽じも洩らし給はぬ、いと忝なし。いづくにてか有りけむ。高倉典侍、

國守る道を學べるうなゐ子の末頼もしく見え渡るかな」。山北にて、御供の車にをりぬ。函根の谷川、涼しう流る丶さま、殊に目にとまる。

函根山谷の下水細けれどみなぎる音の高くも有るかな」。田は、まだ返すべくも有らず。れんぐゑ草、植ゑたる如く咲きたり。細き畔道を、辛うじて、老人の走り來るに、御車早ければ、ほのかにも見奉らざりけむと思ふに、いとびん無し。富士の嶺は、いよ〳〵近う成れり。まだ、晝にも程あるよ、かう、遠くも來つるかなと、

更に打驚く。所の名ども、くはしう聞かまほしけれど、さる可き人も無し。日頃、齒の痛みし餘波にや、肩痛みて、筆取り出でむもうるさければ、只、高嶺をのみ打仰ぐ。

心行く春の旅路に富士の根もまさき迄に晴れし今日かな」。海原のけしき、將いはむ方無く、心の塵も打拂ふべし。倉澤のわたり、人傳に聽きしは愚なり。そのこたちは、珍しげ無きにや、居眠り打ち爲たり。實に、御設けどもに勞れたらむを、餘りに物問はむも、うるさからむとて、停車場の驛の名に心認めて、後に、人にも問ひ、畫圖にも合はせてむと思ひ置く、濱松にて、車の止まりたれば、御前に參りぬ。三保の松原は見つやとのたまはす。夫のみは見侍りにたれど、問ふ人も侍らず、有りしやう啓すれば、咲はせ給へり。太夫さぶらへば、案内乞へとのたまはす。されど、車の響に、聞き取れぬこと多し。愛子の君に、歌や讀み給へる。見せ給へと責め聞こえさすれば、見せ給へり。

ま鐵路の斜になりし程見ねて富士の姿の變はりぬるかな」。水の上に、車の掛かりぬと思へば、新井の渡なり。始めての旅路に、打驚かるゝ迄、面白き海山多かれど、此のわたりの景色、更に譬へむ方無し。いかにして、かゝる橋は渡しけむと、工

事の巧なるを思ふが内に、打過ぎぬ。五時に、名古屋に着かせ給へり。親王たち、大臣たちを始め、迎へ奉れる人、數知らず。

大前に候ひ馴れし人見れど都に着きし心ちこそすれ。行在所は、東本願寺の別院なり。道の程、聴きしより遠き心ちす。拜み奉れる人、夥しう、いかなる道とも見ゐ分かぬ迄なり。上は、日頃の演習にも、勞れさせ給はず、大御氣色、麗しう座しますも嬉しさ、譬へむ方無し。先、大宮の御言傳や申させ給ふらむ。受けさせ給へる、御用意、いと〳〵畏し。國の親と仰がれ給へる御身の御宿世、事新しきやうなれど、いと有り難くこそ。演習の圖など、とうでさせ給ひて、見せ參らせ給ひ、宮の太夫など召して、見せ給ふ。侍從たち、渡りに候ひ給ひて、樣々の物語し給ふ。甚じとも、甚じかりつる雨をも、聊厭はせ給はで、いそしませ給ひ、或時は、兵と共に、同じ所にて、おもの聞こし召し、或時は、奇しき物にて、水奉りなどして、西に、東に、御馬を走らせ給ひし御有樣の、世に有り難き事どもを承りて、皆、涙打ち拭ひぬ。

丈夫に有らぬ我さへ身を捨てゝ仕へまほしく思ふ御世かな

教の庭

十一月五日兼題　夜水鳥

天

水鳥のこゑのみおきにさわぐなり　熊本縣菊池郡城北村　佐々有郷子
つきのかげなき浪のよる／＼

地

葦鴨のなくふしどにさえ行くは　府下麹町區有樂町一丁目　工藤まさ子
うきねの床に霜もや置くらん

人

小夜ふけていけの汀やこほるらむ　埼玉縣大里郡佐谷田村　福木いね子
とほくなり行く水とりのこゑ

浮寐とも思はざるらんみづとりの　石井德子
たまもの床のこほるよすがら

夜もすがら玉もの床のうきまくら　石井かめ子
ながるも知らでねむるみづ鳥

（天地人のほかは原稿到着順なり）

水鳥のはおともさむしうきまくら　伊藤海子
霜のうはぎをよはに重ねて

池の面のみぎはよりこそ氷るらめ　小橋幸子
おきにこゑする夜半のをし鴨

散り浮ぶ木の葉と見しは照る月の　千々波橋子
かつらの川の夜半のみづどり

霜はらふ音ぞきこゆるみづとりの　青木春子
うきねのとこや氷りそめけむ

水鳥のなくこゑたえずきこゆなり　永井さい子
うきねの床やわびしかるらむ

夜をさむみふけ行くまゝに水鳥の　片岡光子
なくねもさゆる心地こそすれ

更けゆけばいけの面やこほりけむ　羽田三緒子
なぎさにまよふみづとりの聲

小夜ふけて羽きる鴨のおとすなり　羽田たか子
うきねのとこに霜や置くらん

夜をさむみねざめてきけば水鳥の　高井米子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しも打ちはらふ音ぞたえせぬ
夜嵐にこほりはつれどみづとりの　上野　兼子
うきねのとこや如何なるらむ
我かねやの枕にちかくみづどりの　土生　満子
こゑふきおくる風のさむけさ
おくしもをはらひかねてや水鳥の　尾崎なほ子
聲かるゝまでよたゝなくらん
川風のさむきゆふべはみづどりの　神田　春子
うきねの床ぞおもひやらるゝ
かぜ寒く夜やふけぬらん月かげの　溝口　信子
傾くまゝにをしの聲なく
蘆かもの上毛にかゝるいけみづも　野尻　鶴子
こほりはつべき冬の夜半かな
夜をさむみあしの穂綿を雪とみて　佐藤千代子
かつぎもあへずくゝひ鳴く也
小夜ふけて霜もやおくらん水鳥の　横田　穀子
はねきる音のさえわたりつゝ
夜もすがら羽がひの霜はゝらへ共　相羽　政子
なほおきあまる池のあしかも

小夜ふけていりえにさわぐ蘆鴨は　西田　孝子
あまの征夫にあひやしぬらん
浮き沈みさだめがてなるをし鳥は　加藤　君子
なみのまくらに幾夜へぬらむ
夜をふかみこゑもさえゆく水鳥の　白井　國子
はねきる音ぞさむけかりける
夜もすがら鴨の羽がひにおき餘る　藤田　貞子
しもにさえゆく聲のさやけさ
置きあまる霜夜をふかみみづ鳥の　荒濱ゆふ子
はねきる音ぞさむけかりける
池水のうきねのとこやさむからし　白岩あい子
おきふししげく鴨ぞなくなる
小夜ふけて霜やますらんあし鴨の　加藤とせ子
はねきる音のたかくもある哉
夜はさむみうきねの床や氷りけむ　平澤とよ子
かつぎもあへず水とりのなく
池水のたまものとこやさむからん　高橋なみ子
うきねわびしくかもめ鳴く也
小夜ふけて友よびかはすあし鴨の　三田村つし子

はねきる音の寒くもあるかな

世の中にわれのみなりと思ひきや
うきふししげくあし鴨のなく　行田ゆき子

冬の夜のふけゆくまゝにさえ渡る
つきかげさむみ水とりのなく　平井ふゆゑ

夜もすがらいけの芦風なきとよみ
はねきる音のたゆる間ぞなき　川村ちま子

何時しかも夜やふけぬらし遠方の
いけのみぎはにあし鴨のなく　馬場とく子

池水のこほりやしけむさよふけて
はねきる鴨のこゑぞしづけき　伊地知とく子

月影のきよき水ぎはにすむとりは
なく音もいとゞさえ渡りつる　春部まさ子

氷りてや波のかよひぢたえぬらむ
うきねわびしく鴨ぞなくなる　内田　慶子

小夜ふけてなくこゑさむし水鳥の
はがひのうへに霜やおくらむ　松井たまみ

遠方のいけにすむてふみづとりの
こゑきく時ぞ小夜ふけにける　山本　澄江

さよふけて池のみぎはや氷るらむ
遠ざかりゆくかものうきふね　山口きよ子

夜を寒みねざめて聞けば置く霜を
はらひかねてや水とりのなく　吉田　芳子

月影のかたぶくまゝにさよふけぬ
うきねわびてや蘆かものなく　坂口しん子

霜ふかみ蘆間にねむるみづとりの
なみのよ床にすめるつきかげ　横敷たか子

小夜ふけていり江にさわぐ水鳥は
うきねの床やこほりそめけむ　坂口たみ子

夜をさむみうきねの床や氷るらむ
ふしも亂れしあしかものこゑ　宇野さく子

小夜ふけて波のうきねや寒からん
をしの上毛のしものしろたへ　吉田　賴子

筏さす夜ふかきかものみづとりは
おどろかされて騷かすらん　南大路正子

池水のこほりをいたみをしどりは
うきねの夢もむすばざるらむ　南大路芳枝

月影をつばさのしもと見るまでに　森田てる子

いけみづさむく鴨ぞなくなり

蘆鴨の羽かぜもさゆるふゆの夜は　森田とく子
なくねも氷るこゝちこそすれ

照る月の影さへさむくおく霜を　森田とき子
はらひかねてやさわぐあし鴨

夜もすがら羽切る音のたえせぬは　千日　文子
かものはを羽に霜やおくらん

置く霜を花とや見らむ池水に　松田　靜枝
すむ水とりのゆめののどけき

富士川のむかし忍べど夜あらしの　松田いし子
わたるなぎさに騒ぐみづとり

難波江のあし間を蛩やあざるらん　河野　文子
とほざかりゆく鴨のうきごゑ

夜を寒み浮寐のをしのふたならび　土屋　子
こほりも夢もむすびそめけむ

ぬば玉の冬の夜とこやさむからむ　碓氷　信子
ふけゆくまゝに水とりのなく

夜もすがら聲たえずなく水とりは　碓氷たけ子
うきねの床の霜もはらふらし

打ちよする浪のまに〳〵うく鴨の　碓氷わか子
よどこを寒み音をのみぞきく

よをさむみねざめてきけば池水の　落合みさを
氷るみぎはにをしぞなくなる

池水になくねもさむしをしどりの　藥師寺芳子
うきねの床やこほりそめけん

難波江の蘆間にすめるみづとりの　横山きみ子
なくや霜夜のうきねわぶらん

夜もすがらをしのつばさの音す也　山田　先子
はかぜにいけの水やこほれる

かぜ寒み川邊はよるのこほりゐて　藤澤　元子
浮寢わびしくをしぞなくなる

冬の夜のふけゆくまゝに霜ませむ　高橋　政子
をしのはねきる音ぞたえせぬ

よもすがらなく聲寒くきこゆなり　高橋千代子
あはれます田の池のをし鳥

夜をさむみうきねの床や氷りけん　宇多田揚子
たちさわぎてぞ水とりのなく

冬がれのあしまの床やこほりけむ　岡本　庫子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ながきよすがら水とりのなく

水鳥のこゑもさむけくきこゆなり　江馬信子
はがひの上にゑもやおくらん

吹きおろす山下かぜの夜をさむみ　道廣八重子
みづにうきねの鴨ぞなくなる

月影のながれもあへぬいけの面に　水谷きよ子
うきねやすらむ水とりのなく

うらかれし眞菰隠れにふすをしの　安井勇子
鳴く音もさむき冬の夜のそら

小夜ふけて衣のひもをむすびねの　安井貞子
ゆめおどろかす池のみづとり

終夜さむさをかこつみづとりの　島田悦子
わしまの床もゑもかれにけり

夜もすがらうきねになれし水鳥の　太田兼子
たまものとこも氷りはつらん

小夜ふけてなくねちかづく都どり　遠藤皆子
なをきくだにも床しかりけり

置く霜をはらひかねてや水とりの　藤野たけ子
うきねわびしくなき明すらむ

ゑき波の夜床をあらみみづとりの　岡部とめ子
下り立ちかぬる志賀の大わだ

幾度かねざめてきけばみづとりの　師岡千代子
ゑものはねきる音のわびしさ

月影のさゆるゑも夜はいかにして　師岡清子
かつぎやすらんをしの衾は

さむき夜のたまものとこの水鳥は　川口とは子
深きおもひになきかはすらん

十一月五日兼題　冬野

天　府下芝區三田四國町　師岡千代子

秋のなごりを誰にとはましといひけむ霜枯の野べたかりさびしくあはれなるものはあらざりけり昨日まで宮人に撰ばれしさまざまの虫はその聲もとどめず風流士にかぞへられしいろいろの花はその色も見えず朝毎におきわたす霜の一つ色と夕毎に木枯の同じ寒さに吹しくとのみにてひるだに行かふ人もまれなるをまして夜は人氣なきまでになむこのあはれにさびしき冬枯の野べのさまに思ひ合

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さる丶は女の身なりかしさるは麗しと數へられし其色もあせおもしろしと撰ばれしそのこゝろもかれてすがたかたち冬の丶如くおとろへ行きたらんには誰人かとひけむ何人かおとづれむさる事あらせじと思はんには花の色虫の聲のうるはしきを思はず野べの姫松みさを正しく生立たむ霰霜のさむさ木がらしのさゆるも物の數かは降つむ雪にたへ天雲しのぎて世にあふがる丶ときは樹ともなり得べしと冬野の姫松を見ておもふ旨をしるすになむ

地

府下神田區須田町　加藤きみ子

遠近の山の木ずゑもやう〱すき見え垣根にさへ霜おきてあはれさびしき冬野とはなりぬ實に年月は人を待たずとや昨日までは秋の空ながら紅葉のにしき匂やかなりしがいつしかなごりなく落葉して見るかげもなき梢には鳥どもの所得がほにさわぐめるもいとあさましうあん見渡す限只一はらの荒野にて目に入るもの何とてすゞろにあはれを催さぬはなしをりふしのうつろふ中にも春こそ心の浮立つものなれと云ひけんはうべも此事なりかしされどもつひには秋にあはではつべきならひならねば又冬がれとならぬものかはさるはたゞ野べの木草のみにもあらずおよそこの世に生きとし生けるものは必ず春のさかりにつとめておとろへぬる秋冬にもたのしく過ぐさん事こそ願はしけれ

人

福岡縣志摩郡前原　藤野たけ子

霜月の名にたがはずおちあまる庭に神無月のなごりにやみそれまじりに打しぐれていとものうきにけふはすこしの晴間見ゆれば冬野のけしき見むとていで立つ千種にさきし花の錦も只ひとつ色にさはみわたりそれさへやう〱ちりゆきて里人のかり殘したる薄も今は招くべき袖だにいたう霜枯れたるに風のかよへるは秋のものとも見えず色香さそひし女郎花藤ばかまなど名殘忍ばん姿さへなくなりぬるあはれにはかなしその中に菊のおくれてみさをたてるいとゆかしくげに千年も經ぬべき心地ぞせらる

佐々有鄰子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

をがやはらかれてのちだにやすからぬ
　　しものみだれをとふあらしかな
と諸平翁のよみいでられたるもうべなりけりな立いづる野べは桔梗の花霜にしをれ女郎花はすがたもみえず藤袴は風にみだれ百舌鳥のから聲のみひとり木末高くきこえてあなたの山よりふき落す風は身よしみとほり野末の細道いとゞふみわけかねてなん

白井　國子

秋のあはれもいつしかすぎて里近くきこえし鹿の聲も遠ざかり木々のもみぢもなごりなうちりゆきつゝ山ざとの筧をうづむる頃となりぬればひとりゐたらんもいと慰めがたくて日ごろの友がきそゝのかしつゝ遠からぬ野邊に物してまだきにつぼみの菊ども見むやとへだてなく打かたらひゆくに思ひしにもまして景色いとさびしく只木枯の松ふく音のみさわがしくきのふのにしきひきかへて今日の冬景色何となう物かなしうたゞ枯れのこる梢の骨ばかりあらはにたちたるさまげにあさましき冬野とはなりぬやがて日も西山のはに近づき空のけしき曇りがちにてふりみふらずみまた時雨めきて心もとなければあぢきなさにかへりつ

山本　澄江

冬枯の景色ばかりあはれなるものはあらじ霜いたうおけるあした野邊を見つゝありくに水車にひける筧に氷柱のさがりたる況して人目も枯れにし田の面に案山子のひとりすてられたるさまなどさびしさいはんかたなし

松田　静枝

さを鹿の聲も今はかれぬ木草の葉も淺ましうちりうせぬ都にもあらぬ詠めぞと千種の花にあくがれし小道一筋のみはもとのまゝにてあはれ秋のかたみとおく霜白し

碓井のぶ子

學びの窓に火桶をたよりに此の世になき人共を友としてこよなく樂みつゝゐる折しも日頃親しきどもどちうちむれ來て今日こそあはれなる野邊のさまをも見んいざたまへとひかるゝまゝにいでゆき

ぬ遙か見渡せバ秋のかたみとて紅葉あし丶木草もいつしか殘りなくちりはて遠近の梢には冬の花咲きて廣やかなる野邊はげに銀の世界とみまがふバかり春秋のけしきにも優りていとあはれこそおぼえしか

碓井たけ子

昨日まで山の梢は立田姫の織出し丶とかやいとうつくしき錦をなし一面の千草は香しき匂ひをはなちあはれ此の景色には櫻の春も及ぶまじと思ひしに今日はしも立ちいで丶四方を見渡せどいつしかと霜かれにうつろひはていと淋しき冬野となりにたり

宇多田楊子

人目も草も枯れ果て丶見る影もなき野邊に打出てつれど淋しさはいや増てきのふまで耳にき丶眼にもながめたりし千草の花はさら也鈴虫の聲などこしかたのみ思ひやられて中々にむかしのことさへ忍バるれど覺えず袖をしぼりつ丶歸りぬ

兼題

十一月廿日
- 歌……春日局
- 文……雪の朝友を訪ふ

十二月五日
- 歌……雪中早梅
- 文……披書思昔

副島伯爵閲
東久世伯爵著

尋常小學修身書　全四册
全　教師用　全四册
高等小學修身書　全四册
全　教師用　全四册
尋常小學國史談　全二册
高等小學國史　全三册
中學國史　全六册

右各府縣檢定審査ょ付必用之
方へは御申込次第贈呈可致候

發兌所

國光社

國光は忠孝節義の士氣を激勵し固有の美風良俗を扶植し以て邦家進取興隆の基礎を鞏固にし殖産軍備教育の法廣く宇内の秀美を蒐め富强の策を講するを務とす其時事を評し活勢を論するに當りては公平の眼を以て大局の上より國家の利害を觀察し太古ゟ溯り萬世ゟ亘り時流を趁はす世好ゟ投せす卓然獨立正言公議眞理中道を得以て國光を世界ゟ照被するを旨とす

國光

每月二回發行
十日廿五日
一冊代金拾三錢
但全國無遞送料

國光第七卷第一號目錄

○國光
國光第七卷敍
邦家の大礎(承前)
京都市民に望む
師弟の誼
西隣の老帝國(承前)
對馬島邊警考(承前)
○鏡の影
藤原三守傳
○劍の光
修身教科書につき……從二位子爵岩下方平
地文的事談……正五位肝付兼行
對外政策の方針を公示すべし……寺師宗德
○瓊の德
詩歌數十首
○文の園
立原杏所小傳……正六位…栗田寛
足尾銅山繪卷の序……酒井喜雄
成美塾記……川口鷲
○花の俤
楠氏夫人異聞の續……細川潤次郎
○大和錦
書經皐陶謨講義(承前)……元田永孚
豈好辨……田岡德倘
水府君献策(承前)……
○時事
●陛下親臨●咄何者ぞ●天果して何の意ぞ●密獵船●大鳥公使●名士談●日本と外權

發行所
東京京橋區築地
二丁目廿一番地
國光社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女鑑第四十九號目次

女鑑
家庭の一科 岩下方平

論說
婦人の饒舌不饒舌 三輪田眞佐子
女子要言第二篇(二十)

史談
原惣右衛門の母 三橋要也
初女の貞操 上野弘道

家政
育兒小言(三十七) 武谷水城
折形(二) 有住齊
看護法捷徑(二十六) 三笠舍主人
漬物鹽加減(六) 駒込烹軒

學園
日本文典(つゞき) 杉谷正隆
手紙の事 雅波律生

漫錄
三蛾三說 松野操雄●千世の濱松●千歳の基●門田のさなへ●越後土佈 あゝま
女畫師(其二) 乙羽庵主人

文林
歌 山階宮●近衛忠熙●德大寺實則●毛利元德●東久世通禧●佐々木高行●前田利嗣●長岡護美●黑田清綱●高崎正風●前田利鬯●諏訪忠元●小出粲●坂正臣●棟松有經●谷勤●内藤存守●岡部譲●上地信光●三浦千春●光岡正彰●佐々豐水●草野隆道●勝家貞艮●鍋島榮子●前田朗子●柳原愛子●小池道子●安東松平健子●鍋久子●中島歌子●三輪田眞佐子●諏訪晴子●菊子●小川昌子●師岡須賀子●海上壽子●河野ふみ子
文 みちのつとはしがき 税所敦子

雜報
●婦女鑑●女子敎育に關する私見●月次花鳥色紙形●雨月物語

餘芳
みちのつと 小池道子

敎の庭
●狀文數十首
●口繪 高橋松亭
●挿繪 宮岡永洗

（明治廿四年八月八日内務省許可
明治廿五年三月十二日遞信省認可）

社告

○代價は郵貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月二回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ケ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿六年十一月四日印刷
同年同月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人 川崎直衛
同 編輯人 山根勇藏
同 發行所 國光社

（東京國光社印刷部印行）

Digitized by Google